

大学における知的財産教育の 取り組みについて



磯山 弘 信 (春秋会)

私は、大学でおもしろい授業をしています。この授業の内容についてお話します。

大学は東京工業大学です。授業の科目名称は「独創機械設計」です。授業の目的は、学生自身が、発明、先行技術調査、設計、製作、特許出願の明細書等作成、出願手続きを行うことにより、設計・製作技術を身につけ、かつ特許マインドを育てる、ことです。

受講する学生は、工学部機械科学科3年生で、50～60名です。授業の期間は、後期（10月第1週～翌年1月第5週）の毎週月曜日です。時間は、午前9時から午後4時30分までです。実際には、機械の完成まで3月末までかかります。

教員等は、主担当の助教授が1名います。授業の全日数出席し、全般的なアドバイスをします。このほか、教授1名と助教授4名がいます。彼らは、時々出席し、相談を受けます。また、助手1名と技官5名がいます。彼らは、全日数出席し、製図、旋盤等の操作、IC制御等について、相談を受けます。最後に、非常勤講師の私があります。特許関係の講義をし、かつ特許出願書類作成の指導をします。

授業の初日は、特許法の基礎、特許をとれる対象・とれない対象、特許をとるための必要条件（特に、新規性、進歩性）、特許をとったときの利点、先行技術の調査方法（特許電子図書館（IPDL）を利用）について講義します。新規性担保のため、自分たちの発明は秘密を守るようにいいます。

つぎに、2週間かけて全員に発明をさせ、発表させます。このとき先行技術調査の結果も発表させます。

発明に当たっては、テーマが与えられます。平成13年度のテーマは、「健康」に関連するものでした。平成14年度のテーマは、「エンターテインメント」に関連するものでした。平成15年度のテーマは、「一家に

一台」に関連するもの、または自由でした。

アイデアの斬新性、製作の可能性、予算（10万円）の範囲内か等を考慮して、全員の発明のうちからベスト5（またはベスト6）を選びます。選ばれなかった人は自分の好きなテーマのグループに入ります。1グループ約10人の第1～5班（または第1～6班）ができます。

各班に2人の特許担当者を決めます。特許担当者は、先行技術がないか特許電子図書館（IPDL）でさらに詳細に調査をします。先行技術があるときは、発明の設計変更を行います。

その後、約半年かけて発明品の設計から製作までを行います。すべての作業は、学生が主体的に行います。教員等は、発明品の設計・製作について原則として口を出さず、学生から相談されたときにアドバイスをします。

発明品が完成に近づいた12月末ごろ、特許出願の願書、特許請求の範囲、明細書、図面、要約書の作成方法について、1回だけ講義をします。私の作ったマニュアルを基に説明します。各班の特許担当者は、明細書等の特許出願の書類を作成します。

特許出願書類の作成と手続きについては、東京工業大学産学連携推進本部（大学知的財産本部）のホームページ（<http://www.sangaku.titech.ac.jp/index2.html>）、または財団法人 理工学振興会（東工大TLO）のホームページ（<http://www.titech-tlo.or.jp/>）にも掲載されています。ここでは、特許出願書類の作成の方法と、特許出願書類の提出手続きの方法が記載されています。特許担当者は、これらのホームページを見ながら、明細書等の特許出願の書類を作成することができます。

特許担当者が書いた明細書等は、私がチェックをします。おおまかなアドバイスをし、なるべく学生自身の文章で書かせます。

平成13年度は、特許出願書類ができたなら、学生自身が特許庁へ行き特許出願をしました。班の全員が共同発明者となりました。特許出願料と電子化手数料は全員で分担しました。一人約3,000円となりました。第1～5班のうち第2, 4, 5班が特許出願をしました。

平成14年度は、第1～6班のうち、第1, 3班の特許出願については、東工大TLO(理工学振興会)から譲渡の希望があり、譲渡契約をしました。この2つの班の発明については、東工大TLOが特許出願人となり、特許出願をしました。

平成15年度は、第1～5班の合計5つの発明品について、産学連携推進本部に発明届出書を提出しました。現在審査が継続されていて、いまのところ3つの班の発明が特許出願してもらうことになりました。

東京工業大学は、文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」の応募テーマ「主として教育課程の工夫改善に関するテーマ」において、取組名称「進化する創造性教育」が採択されました。ここで紹介している授業の「独創機械設計」は、採択理由の一つに入っています。

私は、「独創機械設計」のほかにもう1つ同様な授業をしています。大学は同じく東京工業大学です。科目名称は「発明特許論」です。授業の目的は、先行技術調査をした上で自ら独創的な発明をし、さらにその発明について特許出願書類を作成する等具体的な体験をしながら、発明及び特許について修得することです。受講する学生は、工学部機械宇宙学科4年生です。授業の期間は、前期7回で、各90分授業です。

ここでは、「独創機械設計」とは違い、実際に機械は作りません。各学生が発明をし、その内容で特許出願書類を作成します。

授業が始まる2週間前に、ポスターを出し、あらかじめ課題を2つ与えます。1つ目の課題は、授業前に発明をしてくることです。発明のテーマは、「売れそうなものまたは方法」です。ないときは、自由なテーマでいいことにします。2つ目の課題は、先行技術を調査してくることです。先行技術の調査方法

は、配布資料に記載しておきます。

授業は、つぎのように進めます。第1回は、特許法の基礎、および先行技術の調査方法を講義します。また、インターネットを使った先行技術調査の実習をします。第2回は、各自が作成した先行技術調査報告書と発明開示書をもとに、先行技術調査結果と発明の内容を発表させます。第3回は、特許出願書類の作成方法について講義をします。第4回は、各自が作成した図面について発表させます。第5～7回は、各自が作成した明細書および特許請求の範囲について発表させます。

この授業からは、9つの発明が生まれました。これらの発明については、産学連携推進本部に発明届出書を提出しました。現在審査中です。

以上述べた2つの授業を受けた学生は、総じておもしろかったとの感想を述べています。特許出願の明細書等の作成は苦勞でしたが、将来役に立つと思うとの感想でした。また、授業で行ったことは、すべてが実体験を伴うので、よく身についたと思います。

私は、この授業は学生の特許マインドを育てるのに理想的な授業ではないかと考えています。理由は以下のとおりです。従来の大学の授業は、受身の授業が多かったと思います。したがって、学生自身が試行錯誤をしながら自分で何かをする機会が少なかったと思います。これからの時代は、独創的なアイデアにより、科学技術に貢献するとか、社会に還元できる発明をすることが求められていると思います。そのためには、なるべく若いときから、試行錯誤する訓練をする必要があると思います。自分自身で何か新しいアイデアを出したり、それを具体的に作ってみて試してみたり、うまくいかなかったら原因は何か考えたりする機会を作ることが大切だと思います。その意味で、学生自身に発明をさせることはいい方法だと思います。また、特許化することにより、特許の意味や重要さが実感できるのではないかと思います。さらに、その発明品が製品化することがあれば、発明意欲が増進すると思います。

このような授業が多く大学の行われることを望みます。

以上

日本一周青春18キップの旅



服部 博 信 (春秋会)

今思えば、優雅な旅だったかもしれない。弁理士試験浪人をしている頃、試験も終わり、あとは合格？発表を待つばかりだった平成9年8月。私は青春18キップを手日本一周の旅に出た。

青春18キップ

青春18キップとは、1枚の切符でJRの普通・快速列車であれば1日中乗り放題×5回が可能なキップである。新幹線・特急・急行には、たとえ特急料金等を払っても乗ることはできない。つまり、暇人ためのキップである。



ルール

旅に出る前に、自分なりのルールを決めた。

- ・ 宿泊は列車内又は船内とする。
- ・ 1日1回お風呂に入る。

お金もないので、ホテルや旅館には泊まらないことにした。お風呂はやっぱり身だしなみのため、そして各地の温泉を楽しむためである。

出発

まず、西へ。東京発「快速ムーンライトながら」に乗り込み大垣へ。午前0時を回って初めて到着するのが横浜駅なので、東京ー横浜のキップを購入し、横浜駅から青春18キップを使用する。大垣駅到着は午前6時過ぎ。眠い目をこすりながら普通列車に乗り継ぐ。ここからが長かった。大阪を通過、姫路、岡山、徳山、下関、博多、大牟田と乗り継ぎ、熊本

に到着したのは、23:55。ほぼ24時間電車に乗っていた。おかげで、風呂に入ることができず、初日から第二のルール「風呂に入る」を破ってしまった。前途多難、異臭漂う旅の始まりである(熊本まで1315km)。

鹿児島～大分

熊本では夜の熊本城を見ながら散策した後、桂花ラーメン本店で本場の熊本ラーメンを食した。宿泊は西鹿児島行きの特急ドリームつばめ。特急なので青春18キップは使えず、乗車券と特急券を購入して乗車した。午前5時に西鹿児島の手前の伊集院という駅で降りるまで、ぐっすり眠ってしまった。伊集院からはバスで枕崎にぬけ、再びJRに乗った。真夏の日差しが照りつける南の大地を走り抜け、指宿に到着。ここでこの旅初めての風呂、指宿温泉に入った。入っているのは私一人だけで、久しぶりにゆっくりと汗を流した。



鹿児島市内で昼食を済ませ、隼人という駅からえびの高原に行くお座敷列車に乗り込んだ。途中、珍しいループ線路を通り、のんびりと列車は進んだ。人吉、八代、熊本と列車を乗り継ぎ、真夜中の阿蘇山の横を通過して大分にぬけ、深夜に別府に到着。別府温泉を横目に見ながら、本日の宿泊地、四国の八幡浜行きの船に乗り込んだ。八幡浜港には3時頃到着するが、その後朝5時まで船内で宿泊することが

できた(八幡浜まで2062.9km)。

四国巡り

早朝船を下りて近くの八幡山駅まで歩き、JRに乗った。途中、松山で降りて有名な道後温泉に入った。建物は素晴らしかったが、風呂は銭湯のようだった。道後温泉近くの親戚のお墓をお参りし、再び列車に乗った。その後、琴平駅で途中下車して金比羅山をお参りし、また、大歩危-小歩危間約10キロを歩いて溪谷の絶景を楽しんだ。乗り込む列車は相変わらず普通列車なので、高知に行く途中の新改駅では、20分以上も通過列車を待ちをした。高知では、駅近くの銭湯で体を流し、工事中のはりまや橋を見て、再び列車に乗った。高知発京都市行き「ムーンライト高知」がその日の宿泊地となった(高知まで2413.3km)。

滋賀でしばし休憩

京都を經由して、滋賀県の近江八幡へ。私の友人宅を訪ね、ひさしぶりの布団で十分休息をとらせてもらった。滞在中、友人の車で京都に行ったり、今話題の美浜原発近くの水晶浜で海水浴もした。数日後、朝風呂を浴びてから再び旅路へ。新幹線を横目に東海道をひたすら走り、さらに新宿駅から夜行列車の「ムーンライトえちご」に乗り込んで新潟方面に向かった(新宿まで3346.1km)。

北日本へ

朝目覚めると、日本海。新潟県北部の村上という駅に降り立った。村上から日本海側をひたすら北上した。途中、小さい頃に祖父を訪ねて訪れたことがあった大鰐で降り、大鰐温泉につかった。青森から青函トンネルをぬけて函館へ。函館からは夜行の快速「ミッドナイト」に乗って、札幌を目指した(札幌まで4723.1km)。

北海道縦断

札幌では、早朝6:30にもかかわらず、大学時代の友人が会いに来てくれた。しかもお弁当をもって。事前に連絡はしてあったのだが、本当に来てくれるとは思わなかった。感激。しばし昔話にふけた後、更に北へ、最北端の地、稚内を目指した。稚内では、お決まりの宗谷岬を見学した後、日本最北端の稚内温泉につかった。帰りのバスは、私一人。しかも行きバスと同じで、バスの運転手さんとも仲良くなった。途中、自動販売機の前でわざわざバスを止め、ジュースを買ってくれた。バス代もタダ。人の

温かさに触れることができた(稚内まで5119.3km)。

北海道から北陸へ

その夜は、急行「利尻」で宿泊。岩見沢駅で降りて苫小牧を經由し、襟裳岬を目指した。北海道南端の襟裳岬で1曲歌った後(曲名は、もちろん、襟裳岬！)、再び苫小牧を經由して室蘭に向かった。



室蘭では友人夫婦が迎えてくれ、北海道の海の幸を堪能させてもらった。室蘭からは直江津行きの東日本フェリーに乗り込んだ。海を見ながら風呂につき、2等客室ながら、椅子とは違う平らなカーペットの上で朝まで爆睡できた。船は夕方に直江津港に到着し、直江津駅から飯山駅に向かった。ここで大学時代に働いていた木島平のスキー宿で宿泊させてもらった(飯山まで6670.1km)。

長野から東京へ

翌朝、飯山駅から再びJR普通列車に乗り込み、最後の青春18キップを使って、長野、上田、小諸とぬけ、軽井沢に到着した。軽井沢からは大勢の人が乗り込み、車内は通勤ラッシュのようになった。外の景色を見ると、大勢の人がカメラを向けていた。新幹線開通に伴う軽井沢-横川間の碓氷越ルート廃止のため、ファンが押し寄せたようである。もう少しのんびりした旅を満喫したかったが、軽井沢から都会のあわただしさに飲み込まれてしまった気分だった(上野まで6916.8km)。

最後に

この年、私は運良く弁理士試験に合格することができ、現在まであわただしい日々を過ごしている。今となっては、こんな暇人旅は夢のまた夢であるが、いつかまた、青春18キップを手に日本を探検したいものである。

会社員だったころ



落 合 稔 (春秋会)

昔の仕事

先日、事務所の若い人の結婚披露宴に出席したおり、俺の昔の仕事と同じ仕事をしている若者であった。嬉しくなって、話が弾んだ。

四半世紀も前になるが、そのころ設備会社にいた。ビルの給排水や空調設備を施工する会社である。学校を出てから特許の世界に入るまでの8年間は、いわば土建屋の端くれであった。未だ土建屋の感覚が抜けず、客をしくじることもある。

俺のいた設計部門は、高卒から大卒まで取り揃えて若い者ばかり40～50人の所帯であり、ほとんどが30歳前で、みな中目黒の寮生活。会社で顔を合わせて寮に帰ってまた顔を合わせるという生活であった。

そのころ、先輩たちを見ていて社会人というのはこんなものだろうと思っていた。それが、今の世界に移ってから、ちょっと異質であったことに気がついた。

仲間達

T先輩は、入れ込むタイプの人だった。そのころマツダの「RX7」が評判であった。先輩は、1年間金を貯めて「RX7」を買った。当時、先輩の年収に相当する金額であったが、寮で朝夕に飯を腹いっぱい食い、出銭無しで1年間通した。「RX7」を手にして1ヵ月後、盗難にあって、1年間の苦勞がお釈迦になった。

H先輩は、競艇気違いであった。オンナツケの無いおとつあんタイプの男で、毎週のように船橋や桐生に、ときには常滑まで足を伸ばした。そのころ1500人程いた競艇選手の全員のデータを頭に叩き込んでいると豪語していた。マザコンの気があり、母親と競艇の話をしだすと止まらなくなるので、みんなきっかけを作らないように注意していた。

後輩のSは、酔っ払って電話ボックスのガラスを

割り、一晩留められた。次ぐ朝、課長が新橋の警察署までもらい下げに行った。本人の言では、「長電話していたのでトントンと叩いただけ」ということであった。田舎から彼女が出てきて籍を入れたが、金がなくて結婚式を挙げられないという。みんなで、金を出し合ってお披露目のパーティーをやった。世話のやけるやつであったが、野球チームのピッチャーであったから、みんな大事にした。

このパーティーの音頭をとったのが、K先輩である。なよなよの優男タイプであったが気骨のある人であった。仕事は群を抜いてできた。部長と課長が某有名私立大学の学閥風をおわしたとき、猛然と反発した。なぜか、敬虔なクリスチャンであり、なよなよのくせに喧嘩っ早いところがあった。この人には今でも時々、相談にのってもらうことがある。

O先輩は、数々の武勇伝を持つ凶暴な人だった。がっしりした体躯で、左目の上に傷がある。本人は、「保護観察」と言っていたが、うわさでは「感化院(少年院)」にお世話になったことがあるらしい。祭祭のときに、同僚と喧嘩をして、トドメのブロックを投げつける寸前にみんなが止め、事なきを得た。会ったことは無いが、なぜか、このやくざ風の先輩に弁理士の友達がいるということであった。俺が試験に合格したとき、自分のことのように喜んでくれて祝ってくれた。興が乗って、武勇伝になった。おもわず、「35歳にもなって、まだやってんの」といってしまった。この人には、「相手をボコボコにしたらすぐ逃げろ」と教わった。

T先輩のこと

T先輩は、「飲む・打つ・買う」を地でゆく人だった。仕事中に、新橋の場外馬券売り場までよく行かされた。俺も買ったが当たったためしはない。その

ころ10時過ぎまで残業すると、タクシーで帰ってよいということになっていた。先輩とは、同じ春日部に住んでいたのと一緒にタクシーで帰り、別々にタクシー代をきって飲み代とした。課長は分かっていたとは思いますが、何も言わなかった。

飲みに行くときには、いつも腰巾着でついていったが、必ず最終電車であった。先輩は、新橋で飲んでも銀座で飲んでも、何時に店を出れば終電に間に合うかを熟知していた。俺は、春日部の駅で先輩を起こす役である。あるとき、ゆすっても殴ってもおきないので、電車から引きずり降ろしたことがある。そのとき、水をぶっ掛けると起きるということを勉強した。

「毛じらみ」の一件以来、夫婦仲がまずくなった先輩は、毎晩遅く泥酔で帰るようになった。あるとき、現場近くの店から車で帰る途中、信号待ちで寝てしまった。「車を路肩に寄せろ」の声に目が覚めたら警察が来ていた。咄嗟に、「酒を飲んでいるので運転できません」といって難を逃れた。しかし、これがまずかった。その数ヶ月後、やはり泥酔運転で帰る途中、車ごと田圃に落っこってあの世の人になっ

てしまった。

確か、俺が試験に受かった年の6月だったと思う。通夜の日、季節外れの雷雨となった。別れの挨拶にきたなと思った。告別式は、みんなで泣いた。

この人には、社会人の心構えを教わった。「まじめはいいが、くそまじめは始末が悪い」。世の中は「すべてが程度の問題である」と理解した。

あれから

現場がうまく回らず、ノイローゼになって何処かへ消えてしまったやつもいた。総動員で現場作業に出向いたが、先輩が脚立から落ちて足の骨を挫いた。新人歓迎会で、ビールの掛け合いから大喧嘩になったこともあった。このときは、俺も当事者だった。こんな中で育った俺は、今の世界に入った最初の事務所出勤日の朝、春日部の駅で喧嘩をしてしまった。

今考えると、あのころは珠玉の日々だったように思う。

後年、あの馬鹿部長が社長になったことを知った。仲間はいいやつが多かったが、会社はお粗末であった。



光画・Photograph



小林 龍 (春秋会)

わずか1年間でカメラ史50年を遡行！

近年、デジタルカメラが大流行しています。この頃は、一時期の盛り上がりをやや過ぎてきたかな、との感もありますが、今やデジカメ機能付きケータイ電話は当たり前。フィルム代もかからないし、写真屋さんのデジカメプリントサービスも普及した今では、誰でも高画質写真を撮ることができる、至極便利な道具になりました。

また、従来のフィルムカメラはどんなに頑張っても、フィルムカートリッジ（パトローネという）よりも薄いカメラを実現することは不可能でしたが、フィルムのいらないデジカメはとてもスタイリッシュで、スーツの内ポケットからサクッと取り出して使用できる、そんなところも魅力なのでしょう。

かくゆう私も、4年ほど前に初めてコンパクトデジカメを購入し、さらに昨年6月には、趣味に写真を撮る始めてみようかと思いたち、今はやり一眼レフデジカメを購入しました。

ところが元来の凝り性が見事に祟り、趣味が昂じるにつれ謎の先祖返り現象が起こり、せっかくの最新デジカメを使用しなくなりました。すなわち、フィルムの自動フォーカス一眼レフカメラから、手動フォーカス一眼レフカメラへ、さらにはレンジファインダー式カメラを、(経済的備蓄の著しい低減を伴いつつ) 次々と購入し、カメラ史を最後のページからめくるが如く見事に時代の流れに逆行してしまっただけです。

レンジファインダー式カメラ。その名に耳慣れない方も多と思います。一眼レフでは撮影レンズを通る光をカメラ内部で屈折させ、撮影者が被写体を捉えるファインダーへと導くことにより、フィルムに写る画像をそのままファインダーで確認できるのに対し、レンジファインダー式カメラは、その辺の

コンパクトカメラと同じように、ファインダー窓と撮影レンズとが全く別々に設けられているカメラです。現在私が専ら使用しているのは、距離計内蔵型レンジファインダー式カメラというのですが、その原型は1954年までさかのぼり、なんと基本的な仕組みはそのときのままほとんど変わっていませんから、毎年新機種が発売されるデジカメと比べ、なんともプリミティブな構造です。

ともあれ、昨年6月にはライカのLの字も知らなかった私が、この1年あまりでカメラ史のちょうど50年分を逆行するような愚行を行なってしまいました。そのいいわけを(自分自身に対しても)してみたいと思います。

不便なのが、また、たまらないっす！

デジカメは便利です。操作はほとんど全自動だし、全自動で撮った撮影結果をその場で確認できるし、撮影した後で失敗に気が付いても、少々失敗なら(それでもフィルムカメラなら完全に失敗作になってしまうようなものでも)、完璧に修正できたりもします。

この便利というのが私の場合には非常にくせ者で、あまりに便利だと何も考えなくなり、あたかも、「いま見えている情景が、いま見えているように写って当たり前」のような錯覚に陥ってしまいます。

しかし見たとおりに写るなどということは誤解も悪いトコです。例えば、いま見えているとおりの情景をそのまま写し取るためには、フィルムなりCCDなどの撮像素子なりにあてる光の量を適正に調整する必要がありますが、ところがこれがなかなか難しい。皆さんもご経験があると思いますが、美しい夕日を背景にした町並みを撮ろうとすると、暮れなずむ町並みはたいてい真っ黒けになります。また、大空をバツ

クに人物を撮ろうとすると、人物が暗くなり、その反対に、青々と広がっていたはずの天空が白っぽくなります。

よく、ベテランの方に「なんで目に見えているのに写らないんだ」と愚痴ると、その度に「そりゃ当たり前だ」と一笑に付されます。

これは明度差が大きい2つのものを人の目で見ると、その差が適度に調節されてしまっていますが、実際の明度差は人間が感じるより大きく、いとも簡単にフィルムの限界を超えてしまうことが原因です。

いかんせん実践経験のない私は、優秀な各メーカーのエンジニアがプログラムした自動露出機能があったために、安全策をとってこれにお任せしていたのです。

最近のカメラは優秀なので、自動露出で使用してもめったに失敗しません。しかし、自動露出を使用している限り（露出補正機能というのを使えば別ですが）、どのような明るさの写真になるか予想もつきません。

そこへいくと昔ながらのレンジファインダー式カメラはひと味違います。はっきりいって硬派です。カメラとは、レンズと、ピントレバーと、シャッターと、絞り（ちょっと専門的ですが）しかついてなく、レンズを通してフィルムに光を集めるだけの、ただそれだけ道具だ、という自覚と、強い自立心を育成してくれます。露出ひとつにしても画面のあちこちの明るさを測って自分で決定しなければいけません（自動露出機能がある機種も存在しますが）。

露出もピントも自動のデジカメでぬくぬくと育った私は、初めのうちは露出調整もしないでシャッターを切ってしまったたり、露出を読み間違えたりして駄作の山を築いていました。が、人間とはよくできたもので、不便に慣らされてしまうとそれが当然になり、こういった1つ1つの動作を体でこなせるようになるものです。駄作の山を築いているのは相変わらずですけど。

また、いろいろ工夫を凝らすこと覚えることにより、以前にもまして撮影が楽しくなってきます。先ほどの露出の例でいえば、画面のどこをどの程度の明るさにするか考えながら何度も失敗しているうち

に、出来上がりの写真の状態が想像できてくる（こともあります）し、あとで現像を見て予想が当たっていた日にゃ（偶然だと思いますが）うれしさもひとしおです。

また、ピント合わせの例でいうと、レンジファインダー式カメラでは、ファインダー窓から一定距離を置いた小窓から見える像をファインダー内に投影して、これがファインダーから見える像とうまく重なるようにレンズのピントリングを調整するので（3点測量の原理）、一眼レフと比べピント合わせがしにくく、また精度も良くありません。

そうすると、より早くピントを合わせるために距離を目測することもできるようになります（予定）。目測のときにはピンぼけしないように、ピントの合う距離範囲が長くなるように設定するので、背景がボケにくくなります。すると、背景にも主被写体と同じくらいの注意を自然に払うようになります（こともあります）。また、ズームレンズなんて便利なものはありませんから、固定焦点距離のレンズばかり使用することになります。すると気に入った焦点距離のレンズばかり使用することになるので、ファインダーを覗かなくても何処までがフレーム範囲なのかが見当がつくようになってきます（これも予定）。

こうなると、もう病膏肓に入ると申しましょうか、ほとんど50年前と変わらないプリミティブなユーザインタフェースが、たまらなく快感になってきてしまいます。この辺になるともうディープな個人の好みの問題であって、ホントのところ手段は何でもいいと思っただけですが、趣味である以上試行錯誤の手間を楽しむのも、これまた醍醐味の一つではないかと思えます。

最新式デジカメを使っているが、最近飽きすぎて楽しみが薄れている方。ぜひ一度自動露出御プログラムを切り、またオートフォーカスも切って、フルマニュアルで楽しまれてはいかがでしょうか？

絵画を描くように

日本語の「写真」の語源やルーツは不明ですが、もともとは、ヘリオグラフィー（ヘリオス（太陽光）によるグラフィス（彫版））というギリシャ語の複合

語でした。ですので、そのまま訳せば「光版」か「光画」と訳して然るべきなのです。が、日本では「真実を写す」という意味で「写真」という語が当てはめられています。だからかどうか知りませんが、日本の写真史をみると、どちらかといえば報道写真のような写真の記録性に重きをおかれてきたようです。また、一般の認識もそうじゃないでしょうか。

でも先ほどのように被写体の姿を見たまま写し取るのはかなり難しいですし、そもそも、ある情景がある人が見たのと同じように他の人が見ているわけではないでしょう。最近では、例えば絵画を描くように、自分がきれいだと思った情景を、自分が感じたように伝えるように写真を写す（まあ、それが嘘

にならない程度に)、というのが表現手段としての趣味の写真の一側面だと思っています。

散歩の途中で立ち寄った鎌倉のカフェ。しゃれっ気のあるインテリアがよかった。

いまブームだと思うんだけど…

写真は、少々運動神経が低下しても長く続けられる良い趣味だと思います。近年のデジカメブームで写真にちょっと興味を抱いている貴方はもちろん、昔カメラを買ったがタンスの肥やしにしてしまっている貴方も、カメラを持って街に出てみませんか？



四日市弁!?



山田 哲也 (南甲弁理士クラブ)

会報委員の仕事として「会員だより」の原稿をお願いしてたら、なんか、自分で書きたくなってきた。でも、ネタはどうする？。

実家が三重の四日市で「標準語」と「四日市弁」を話せるから、伊藤さんの「名古屋弁」(日弁 No.25 参照)に対抗して「四日市弁」でいこうかな。

例えば、四日市では、名古屋弁の「たわけ」(関東の「ばか」と同義)より、「はお」の方がよく使われる。つまらないギャクをいうと、「はおか、おまえー！しょうもないこというとんなあー」とかえってくる。友人同士で、軽いノリで良く使われる言葉で、僕もよく言われた。

ほかに、「だだくさやなあ」(いいかげんやなあ)、「何、めめっとーん？」(なぜ、泣いているの?)、「わやくしーやなあ」(いたずら好きやなあ)等、どんだん調子に乗れそうだけど、やっぱ、このネタはやめとこ。今度、伊藤さんに会ったら「おみやあー、おれのネタ、パクってってかんぞー！」と言われそうだし(笑)。

ちなみに「四日市弁」が近い名古屋より遠い大阪の方の影響を受けているのは、名古屋と四日市との間に大きな河川(木曾川、揖斐川、長良川)があるからだそうだ。

あと、「皆様は白くなりたいですか、それとも黒くなりたいですか。私は今悩んでいます。」という書き出しの和田っちの「肌の色についての考察」(日弁 No.26参照)を参考にしようと思いましたが、途中で断念。何が書いてあるのかさっぱりわからん。

で、なかなかネタが決まらない。そういや、最近あった大きな出来事といえば、次男が生まれ、家族

が一人増えたこと。よしこれをネタにしよう。

あ、でも、子供は平等に扱わないと、すぐ喧嘩になるから、上の2人についても少し書くことにする。

<長女：リカ 平成10年1月14日生>

リカは、妻の実家がある宮城県岩沼市の病院で生まれた。僕がまだ受験生のときだ。大雪になるかもしれないのに、その日の夜に車をとばして、朝一で病院に行った。はじめてのわが子。感動のあまり自然と涙がでた。当然今でもその瞬間を思い出せる。顔は猿みたいだったなあ。そして、リカが生まれたこの年の試験に合格した。リカの写真を机に貼って勉強していたのを覚えている。この年に合格のできたのは、リカのおかげと思っている。

<長男：ジュン 平成11年5月21日生>

ジュンも、宮城県岩沼市の病院で生まれた。その日、どういう流れでそうなったか覚えてないが、同期合格の鈴江の3人(和田っち、岡田っち、栄ちゃん)と徹マンをし、そのまま朝一の新幹線で仙台に向った。新幹線の中で熟睡していて、仙台駅に到着と同時に目が覚めて飛び降りた。2人目のわが子。やはり感動した。寝不足だったはずだが、その瞬間を思い出せる。顔はやっぱ猿みたいで、もみあげの毛が長かった。

このあいだ、ジュンに「好きな食べ物は？」と聞いたら、「マシュマロ」と答えた。その理由がおもしろい。っていうか、大人には到底理解できない。「ふわふわのベットみたいだから」、「小さくなって、マシュマロの上ののってあそびたい」とか言っていた。それを聞いていた僕と妻は、「??」なのに、長女のリカは「いいなあ、わたしも、マシュマロの上であそびたい」だとさ。

<次男：ショウ 平成16年3月13日生>

ショウは、自宅近所の病院で、3月13日（土曜日）の午前3時48分に生まれた（ちなみに予定日は3月16日だった）。

13日の午前2時ごろだったかなあ。僕はいい気持ちで寝ていた。

「てっちゃん、お腹がいたいよ～」

妻がそう言いながら僕をおこす。

「またおさまってくんじゃないの～」

「いや、今度こそきたかも～」

「ほんとで～」

僕は、いつもの朝のように、シャワーを浴び、少ない髪の毛を乾かし、病院に行く準備をしていた。そのころ、妻は病院に行く準備をすでに終わらせ、近所の友人（寝ているリカとジュンをみってもらうために、来てもらった）とともに、僕の準備が終わるのを待っていた。

（後に、陣痛始まっているのに、僕がのんきにシャワーを浴びてドライヤーかけていたのが近所で噂となり、これまで高かった僕の旦那評価点がダウンしたらしい）

僕は妻とともに車で病院に向った。病院に着いたのが午前2時30分ごろで、生まれたのが午前3時48分。僕は、生まれたばかりの3人目のわが子を抱いた。感動の一瞬である。でも顔はやっぱり猿。その後、妻のところいき、疲れきった妻と再会。「よくがんばったぞ！」と抱き合った、かなあ！？。

妻が退院するまでは、僕と子供2人だけの生活だった。幼稚園への送り迎え、食事等、たいへんだった。夜ごはんを、リカの好きなイチゴだけですませようとしたら、ジュンが暴れたのを覚えている。しょうがなく、冷凍のピラフをチンした。

意思疎通の不可能なわがままの塊みたいな赤ちゃんが家に戻ってきてからも、たいへんだった。退院後1ヶ月、妻はお風呂に入れない。そのため、僕が赤ちゃんのお風呂当番だった。3日連続の「うんち風呂」には、かなりへこんだ。妻の実家のお母さんにコツを聞いた。おしりの左右の肉を中央側に寄せた状態にして湯の中に入れておけばよいとのこと。早速やったら、大成功。あとは、お決まりだが、おむつ交換の際の「顔面シャワー」にもへこんだ。

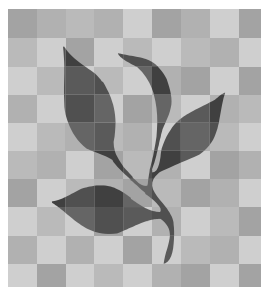
生まれて2週間ぐらいたったころ、そろそろいけるだろうと、ショウちゃんの頭を洗うときに、頭から湯をサブーンとかぶした。そしたら、びっくりして大泣きし、妻が「何したのー！」とお風呂にかつとんできた。ごまかそうとしたが、すぐにばれて、かなり怒られた。

最近では、ショウちゃんも笑うようになった。やっぱり、赤ちゃんの笑顔は最高だ！（美人のおねえちゃんの笑顔もいいけど……）。妻に怒られて気分が悪くなくても、赤ちゃんの笑顔をみればだいじょうぶ。心が穏やかになる。

あと困ったのが、リカからのこんな質問だ。「赤ちゃんは、ママのどこからでてきたの？」とか、「わたしも、赤ちゃんがほしい？」とか、「どうしたら、赤ちゃんもらえるの？」とかである。

「パパとママが結婚して仲よしだから、赤ちゃんができるんだよ」と答えると、リカがこんなことを言ってくれた。「パパはママと結婚してるから、パパとは結婚できないでしょ。パパと結婚して赤ちゃんほしいのに。」。でも、そういや、去年の七夕では、「パパと結婚できますように」と書いていたが、今年は、「ゲームボーイがほしい」になっていたなあ。

以上



我が家のネコ事情

須藤 浩 (南甲弁理士クラブ)



我が家は私と妻、それに娘二人の四大家族である。子どもたちはまだ6歳、3歳と小さいので、毎日家中を飛んだり跳ねたり、走ったりけんかしたりとにぎやかなことこの上ない。しかし最近、新たな住人がやってきた。「ちび太」と「凜々」である。

両者とも大変に毛深く立派なひげを持っている。身のこなしはしなやかで跳躍力は想像を絶する。嗅覚は鋭く、目はたてにも横にも細めることができる。超人的な彼らだが、言語能力には限りがあるらしい。我々に聞こえる語彙はただ一つ、「にゃー」である。

そう、彼らは「ネコ」なのである。私は実家にいるころイヌは何度か飼ったことがあるが、ネコを飼うのは初めてである。ネコよりイヌのほうが飼い主によくつくし頭がいいから、飼うならイヌがいい、というのが私の持論だったのだが、なぜか我が家の最初のペットはネコになってしまったのだ。彼らは妻の知人が飼っていたネコたちなのだが、飼い主がネコアレルギーになってしまって飼うのが困難になったため、うちで引き取ることになったのである。

ちび太は3歳のオス。名前は「ちび」だが体はもうすっかり大人である。茶トラで昔マンガに出てきたネコに似ている。好奇心旺盛で人懐っこい。温和で昼寝ばかりしている。

凜々は2歳のメス。ちび太に比べてかなり小柄の三毛で、わりと愛嬌のある顔をしている。ネコらしいといえばネコらしいのだが、まったく人に慣れようとしない。話によると、凜々は生まれてすぐからちび太に面倒を見てもらっていたので、人よりもちび太になつくネコなのだそう。昼間は凜々の姿を見ることはほとんどなく、物陰に潜んでいる。日が沈むと活動を始める、完全な夜行性だ。

ネコを飼うにあたっては周囲の反対も多少あった。家が傷だらけになる、ネコくさくなる、などなど理

由はいろいろだった。しかし、家にはすでに人間によって刻まれた傷が無数にあるし、ネコくさくなる以前にすでにタバコくさい、など反論可能な点も多く、妻や子どもたちの「ネコを飼う」決心はゆるがなかった。

飼うと決めたからには、ネコたちとも仲良くなりたいものだ。もともと人懐っこいちび太は子どもたちにもよく慣れてきたが、問題は凜々である。私は凜々が隠れそうな場所の隙間をふさぎ、昼間も出てきやすいようにした。努力の結果かどうかはわからないが、最初は家人が寝静まるまで微動だにできなかった凜々も、だんだん人間が起きている時間に顔を出すようになってきた。早くに顔を出したときには、ネコたちの大好物のおやつ、ネコ用かまぼこスライスを与える。かまぼこスライスと人間が結びついてきたのか、凜々が顔を出す時間はだんだん早くなってきた。

時間がかかってはいるが、凜々なりにこの家に慣れつつあるのだろう。ネコなんてただの気まぐれな動物だと思っていたのだが、意外に個性があるものだ。

慣れてきたとはいっても、日中のほとんどを洋服ダンスの上で過ごす凜々に対して、ちび太はすでにかなりくつろいだ生活をするようになってきた。ちび太は家中を探検してまわったのち、居間にあるテーブルセットの椅子の下を定位置に決めたい。最初は前足をたたんでスフィンクス状態でうとうとしていたのだが、だんだん四肢を横に投げ出してしまうと、さらには腹を上に向けてひっくりかえって寝るようになった。しかも口が半開きだ。ちょっとくつろぎすぎではないだろうか。子どもたちが横で跳ぼうが走ろうがお構いなしに寝ている姿を見ると、緊張感・神経質とはまったく無縁のように見えるが、そんなちび太が異常な反応を示すものがある。それ

は、凜々の声である。どんなにくつろいでいても、凜々の呼び声が聞こえると、はっと首を起こし、耳をそばだて、次の瞬間には凜々の元へ走っていく。保護者のつもりでいるのか、はたまた恋人のつもりでいるのか、ちび太には「凜々を守ってやらねば」という使命があるようだ。

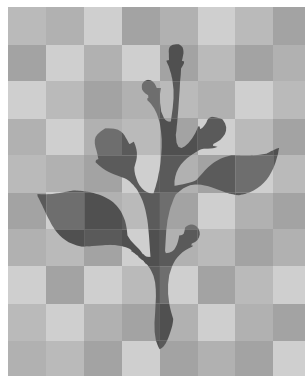
そう考えると、ちび太が人間によく慣れて日中人間のそばで過ごすのも、凜々のために人間を見張っているようにも見える。その証拠に、人間が昼間出払ったり、夜中寝静まったりすると、ちび太はすぐに凜々を呼びに行くのだ。「もう出てきて大丈夫だよ。人間はいないから！」とでもいうように。凜々のほうも、ちび太の呼び声に答えて顔を出す。ちび太が凜々を呼ぶ声は、人間に対して出す声と明らかに違

うのだ。おそらくネコ同士、声でコミュニケーションができているのだろう。ネコなんてただ食べて寝るだけの動物だと思っていたのだが、意外に社会性があるものだ。

ちび太と凜々が我が家へやってきて二週間、ネコたちの生態に驚き、ネコたちの能力に驚く。日々、不思議に新鮮だ。これから人間とネコがどのように関わり合い、共存していくのか大変興味深い。家がかこれ以上傷だらけにならないことを祈りつつ、共同生活を楽しんで行きたいと思う。

そうそう、ちび太にはもう一つ異常な反応を示すものがあつた。それは…かまぼこスライスの袋を開ける音である。

以上



ゴルフ

石橋良規（南甲弁理士クラブ）

山田哲也先生に会員だよりの原稿執筆を依頼され、調子よく「いいですよ」と引き受けたまではよかったが、いざパソコンに向かうとなかなか書くことがみつからない。毎日明細書を書いているのだから「会員だより」ぐらい楽勝だろうという考えが甘かった・・・

ネタを探すべくいろいろと考えた結果、「ゴルフ」について書こうと思う。この原稿を読まれる先輩弁理士の中には、私以上の「ゴルフキチガイ」が多数おられ、「まだまだ甘い！」なんて声が聞こえそうですが、まあ軽く読み流して下さい。

初めてゴルフクラブを握ったのは、意外に早く、小学校3年生（10才）の時である。ここで、私のことを、優雅なお金持ちの家庭で育った「おぼっちゃま」だと早合点されては困る。我が家は平凡なサラリーマン家庭であり、子供にゴルフをさせる余裕など全くなかったと思う。

ただ、この時代は、ちょうどバブルが始まったころ？であり、サラリーマンの誰もがゴルフをやり始めた時代だったと思う。テレビでは、青木、ジャンボ尾崎、中島などが大活躍しており、私の父親もこのブームにのってクラブを握り始めた一人であった。

私の父親は、小さな町工場に勤めており、年に2回（春と秋）、会計事務所が開催するコンペに参加をしていたのだが、そのコンペの優勝商品は、「テレビ」だったのだ。

父親は燃えた！家族を巻き込んで！！

当時はゴルフ練習場も大繁盛しており、週末は待ち時間が2時間なんていうこともざらだった。父親は、①一人で練習場に行くと、待ち時間が暇でつまらない、②父親は練習場まで体力づくりのためにランニングで行きたいと考えているが、クラブを持っ

て走るのはつらい、という訳の分からない理由で10才の私を連れて行くようになり（私は親父のクラブを持って自転車で着いていく）、これがきっかけで自然と私もクラブをよようになったのである。

私のクラブは、当然父親のお下がり。大人用のクラブを私の身長に合わせて切断し、グリップをつけ直しただけの代物である（今考えるとバランスにもない…）。因みに私は左利きである。ご飯を食べるのも、文字を書くのも、左である。野球も左投げ左打ちである。親父は右利き、お下がりのクラブも当然右…。親父曰く「王貞治も岡本綾子も左利きだがゴルフは右でやっている。左利きが右でやると上手になれる！」またまた訳の分からない理由付けである。パターにあってはもっとひどい。「お前には3Iなんて使いこなせない、だからこれ（3I）でパターを作ってやる。」と言われ、父親が3Iのネック部分をバーナーで温めて、ロフトを0度に改造したものを使わされた（父親は町工場に勤めていたので、この手の改造は楽勝だったようだ）。この話からも、私が「おぼっちゃま」でないことは容易に推測可能であろう。

こんなきっかけでゴルフ（というか「打ちっ放し練習」）をするようになったのであるが、やってみると結構楽しい。毎週のように練習場に付き合わされ、日曜日にはテレビでゴルフ中継を親父と見ていると、どうしてもコースに出たくなる。何気なく「僕もゴルフ場に行ってみたいなあ」なんて頼んでみるのだが、「あ～今度行こうな」という気のない返事ばかり。

どうしてもゴルフがしたい私は、考えた末に名案を思いついた。「コースに行けないなら、コースを造ればいいんだ！」

我が家の裏には、広大な雑木林があった（もちろん他人の林である）。そこに石橋カントリークラブを

作ったのである。雑木林の中心に、植木鉢を植える。その植木鉢を中心に半径5メートルぐらいをきれいに均す→グリーン完成。雑木林の彼方此方にティーフランド(18ヵ所)を作る。究極のワングリーンゴルフ場の完成である。スコアカードも手書きで作った。林の入口には看板も立てた。小学3年生にしては上出来である。

早速、学校の友達とコンペを開催！なかなかの人氣であり、放課後は毎日大盛況であった(もちろん親父も招待したが、親父は「蚊に喰われる」という理由で2番ホールでリタイヤした。)

順風満帆のスタートを切った石橋カントリークラブであったが、終わりは突然やってきた。小学校の先生に呼び出されたのである。今考えれば当たり前であるが、人様の雑木林に勝手に入って、しかもゴルフボールを思いっきり打っているのである。問題にならない方がおかしい。犬の散歩をしている人や昆虫採集をしている人から、かなりのクレームが小学校に集まったらしい。無念だが、すぐに撤去させられた。

話を戻す。親父はコンペで「テレビ」をとることに燃えている。が、練習場は前述したように、満員で混んでおり、また毎日行くことは親父の小遣いでは不可能である。

親父は、ある日、私と弟に「学校の帰りにドングリをひろってこい！」と命令をした。ドングリ特訓の始まりである。私と弟は、毎日ランドセルにビニール袋を入れて学校に行く。そして、ドングリを拾いながら帰ってくる。そして、親父が会社から帰ってくると、家の玄関の前に練習用のマットを敷き、そこでビニール袋2つ分のドングリをひたすらに打つのである。この特訓は凄かった。1ヵ月ぐらい続けたと思うが、最後には、親父、私、弟、三人とも目をつぶってでもマット上のドングリをきれいに打つ

ことが出来るようになっていた！

しかし、やはり悲劇はおとずれる。

親父と私と弟は自信満々で練習場へ行った。ドングリが打てれば、ゴルフボールなんて楽勝だ。親父が構えに入る。バシッ！打ったボールは大スライス！おかしいなあ～、もう一回。バシッ！打ったボールは大スライス！。ダメだ。お前やってみろ。私が構えに入る。バシッ！打ったボールは大スライス！弟も同じ。

ドングリが打ててもボールは打てない。親子三人の出した結論である。ドングリはインパクトの瞬間に粉々に壊れてしまうので、どの方向に打ち出されているのかは確認できない。つまり、クラブフェイスがどんな向きでドングリに当たっているのかはまったく分からないのである。

親子三人とぼとぼと帰ったのを今でも覚えている。

こんな小学生時代を過ごした私であるが、高校ではラグビーに燃え、大学ではアメフトに燃えており、ゴルフとは遠ざかった生活が続いた。因みに親父は、何度挑戦しても「テレビ」をとることはできず、バブル崩壊後は、コンペ自体もなくなったようであり、すっかりゴルフ熱が冷めたようである。

私はというと、平成13年に弁理士試験に合格し、この合格を機にゴルフを再開したのである。今度は自分のボーナスでクラブを買って！(小学校時代に右で打ったせいで、ゴルフだけは右になってしまった…)

合格後約3年、年間15ラウンドを目標に頑張っている。現時点での平均スコアは100前後。目下の目標は、南甲弁理士クラブのゴルフ大会で活躍する「おじさま方」をギャフンと言わせることである。

以上

南部アフリカ旅行記

僧野兼世（南甲弁理士クラブ）

去年の秋、南部アフリカのジンバブエ共和国、ボツワナ共和国、南アフリカ共和国に旅行しました。日本人にはあまりなじみのない国ですので、ちょっとご紹介したいとおもいます。

<ジンバブエ共和国>

① ジンバブエへのアクセス

成田から香港またはクアラルンプールなどを經由して南アフリカ共和国のヨハネスブルグ（現地では「ジョハネスバーグ」といいます）に入ります。そして、ヨハネスブルグから空路でジンバブエのビクトリアフォールズに入ります。

② 観光スポット

ジンバブエの観光スポットは、なんといってもビクトリアの滝です。アメリカのナイアガラ、南米のイグアスと並んで、世界3大瀑布の一つと言われていいます。

ナイアガラとイグアスには行ったことがないので比較はできませんが、滝の景観はものすごく雄大で圧倒されます。また、時期によっては滝の水しぶきで土砂降り状態になり、レインコートを羽織らないといけなそうです。私が行ったのはザンベジ川の水量が少ない時期でしたので、霧雨のような状態でレインコートを着る必要はありませんでした。

ビクトリアの滝には、いくつかのビューポイントがあり、場所によっては虹がきれいに架かっています。また、隣国ザンビアとの国境にあるのでザンビア側からも眺めることができます。

また、ザンベジ川でクルージングもできますが、ザンベジ川にはワニやカバ、野鳥が生息している程度で、あまり面白くはありません。

③ その他

後で説明するボツワナもそうですが、この地域は

野生のゾウがたくさん生息しています。現地の人はかなりゾウを怖がっています。ビッグファイブ（ライオン・ゾウ・ヒョウ・サイ・バッファロー）の中でも一番強いと言っていました。

実際、ロッジからビクトリアの滝に車で移動するとき、道路の真ん中に大きなゾウの糞があって、運転手兼ガイドのジンバブエ人フランシスが、においをかぎに行きました。フランシスが、「フレッシュ、フレッシュ」というので、「それがどうしたの?」と聞くと、ちょっと前にゾウがここで糞をしてこの道路をわたってザンベジ川に水浴びに行ったばかりだ。後続のゾウがいるかもしれないから、ここにいると危ない。」と言ってかなり警戒しはじめました。野生のゾウは車を見ると体当たりしてくる場合があり、特に、鼻が届く範囲にまで近づくと攻撃してくるそうです。

また、夜は出歩くことができません。夕方になるとライオンの鳴き声というか雄たけびというか「グオー、ゴロゴロゴロ〜」という声が響きます。夜遊び好きな人でも、松島とも子のようになりたくなければ、夜は出歩かないほうがよいとおもいます。

なお、念のためマラリアには注意する必要があるかとおもいます。日本では、空港に「マラリアなどの感染症には注意しましょう」と貼ってあるにもかかわらず、マラリア予防薬の販売は禁止されており、保健所に問い合わせても買えない（そもそも無いかも）そうです。私の場合、現地で虫除けスプレーを買って予防しました。また、マラリアの感染防止のため、ロッジのベッドには蚊帳が用意してあります。

<ボツワナ共和国>

① ボツワナへのアクセス

ボツワナはジンバブエと国境を接しており、ビク

トリアフォールズから陸路（車で1時間程度）で入国することができます。

② 観光スポット

ボツワナには、チョベ国立公園があります。国立公園といっても、モニュメントや噴水、整備された芝生、散歩道、柵があるわけではなく、単に出入りのゲートがあるのみです。

このチョベ国立公園には、ライオン、バッファロー、キリン、シマウマ、ガゼル、インパラなど、さまざまな野生動物が生息しています。特に、ゾウは約600頭も生息しています。国立公園だからといって、飼育されているわけではありません。完全に野生です。

チョベ国立公園では、「ゲームドライブ」を堪能できます。ゲームドライブとは、オープンジープに乗ってこれら野生動物をウォッチングすることです。動物たちが食事したり狩りをするのは、お腹がすく早朝または夕方、この時間にあわせてゲームドライブをします。

公園内の道路は舗装されてません。わだちなどを頼りに進みます。一番おどろいたのは、ライオンの群れに遭遇できたことです。約10メートル先にたくさんのライオンがいましたが、襲われることはありませんでした。「なんで襲ってこないの？」とフランスに尋ねましたが、「おれもよく分からん。」と返ってきました。わたしは幸運にも母親のライオンが息子に狩りを教えている場面に遭遇しました。2頭のイボイノシシがいて、背後から息子が忍び寄り、逃げ出したところを母親が正面から捕まえてサンドイッチにしようとしてました。残念ながら、息子は狩りの経験が浅く、イボイノシシに感づかれて逃げられましたが、見ごたえがありました。

また、チョベのロッジでは、日本人の団体旅行ツアーで来た熟年の方々とたまたまいっしょになり、ゲームドライブでは、同じジープに乗りました。帰り道にあるご婦人が「どうしてライオンさんたちは襲ってこなかったんでしょうねえ？」という、別のご婦人が「わたしたちは、もう古くておいしくないからよ、オホホホホッ」と言っていました。まさかこんなところまで来て日本人のおばさんギャグを聞くとは思いませんでした。

また、チョベにはチョベ川があり、クルージングを楽しむことができます。チョベにはゾウをはじめバッファロー、カバ、ワニ、ヒヒなどたくさんの野生動物が生息しているので、ザンベジ川のクルージングとは比較にならないほどいいです。チョベ川で有名なのがゾウの川渡りです。ゾウの親子が一列に並んで鼻と尻尾をつないで川を渡ります。

③ その他

ボツワナは南部アフリカの中で最も費用がかかります。その理由は、ボツワナはダイヤモンドが発掘できるため国が潤っているからだそうです。そのため、あまり長い期間滞在するのは得策ではなさそうです。実際、ゲームドライブとクルージング以外は、チョベではやることはありません。上述したツアーの方々のように、昼間はロッジでボーッとしていなければなりません。

<南アフリカ共和国>

① 南アフリカへのアクセス

上述したように、成田から香港またはクアラルンプールなどを経由して南アフリカ共和国のヨハネスブルグに入ります。そして、ヨハネスブルグから空路でケープタウンに入ります。便によってはケープタウンで乗り過ごすと南米のブエノスアイレスまで行ってしまいますので注意が必要です。

② 観光スポット

ケープタウンには、テーブルマウンテン、サイモンズタウン、喜望峰およびケープポイント、ドイカー島、ロベン島などがあります。また、ワインの産地でもありたくさんのワイナリーがあります。

テーブルマウンテンの頂上には、ロープウェイで登ります。強風の日には動きません。頂上はかなり寒いので防寒対策が必要です。

サイモンズタウンのボルダーズ・ビーチには、ペンギン・コロニーがあり、たくさんのペンギンを見ることができます。また、運がいいとビーチからクジラもみることができます。

喜望峰およびケープポイント

喜望峰は、アフリカ大陸の最南端の岬と思われがちですが、実は最南西端です。最南端はアグラス岬

という別の岬です。ケープポイントはケープ半島の最南端であり、ここから大西洋とインド洋とが交わる地点です。それがどうしたと言われればそれまでですが。ただ、水平線はとても見事です。

また、ドイカー島にはアザラシがうじゃうじゃいます。ドイカー島は世界遺産でネルソン・マンデラが投獄されていた刑務所です。

③ その他

南アフリカは、他の国よりも治安が悪いです。アパルトヘイトがなくなったとはいえ、黒人の生活環境は悪いです。白人居住区（豪邸が多い）と黒人居

住区（スラム）とがはっきりしています。また、殺人率が異常に高く、ヨハネスブルグなどは一人で行かないほうが良いと思います。

いろいろと述べましたが、南部アフリカは、南アフリカ以外が治安がよく、現地の人のがのんびりしているせいか、時間の流れが遅く感じます。また、手付かずの自然がたくさんあり、野生動物もたくさん生息しているので、十分楽しめると思います。

以上



「もの忘れについての心配」



瀧野 秀雄 (南甲弁理士クラブ)

立花、武田のシンクロナイズドスイミング・デュエット銀メダル獲得をカラー印刷で報道している新聞の傍らのコラムに、「脳を究める 癒す アルツハイマー克服 ドキュメント挑戦」(2004年8月26日日本経済新聞夕刊) というタイトルが目に入った。

若いときの私自身は記憶力について自信があったか、最近は何かとよくもの忘れをするようになった。例えば、風呂に入るのでははずした眼鏡をあがってからあちこちさがすとか、実にささいなことだが、加齢の進み方より脳の老化が少しばかり速いのではないかと心配することがある。

そこでコラムを見ると、「国内で150万人、世界で1500万人以上がかかるアルツハイマー病、脳の中にアミロイドベータたんぱく質というペプチドが蓄積し、老人斑と呼ばれるシミができて、やがて神経細胞が死んで痴ほうになる。この治療法として注目されるのがワクチン療法。アミロイドたんぱくを体内に入れることで、同たんぱくへの抗体反応を誘発する。しかし米国で数年前に始めたワクチン接種の臨床試験は、患者の一部が髄膜炎を起こし中断された。」そこで東京大学総合文化研究科教授の石浦章一氏(53)が同大助教授の渡辺雄一郎氏(46)と共同で開発したのが、ワクチンを接種するのではなく世界で初めての「食べるアルツハイマー病ワクチン」という「食物となる植物にワクチンを作らせること」を思い付き、「植物に感染するウィルスにアミロイドたんぱくを作る遺伝子を組み込んでワクチン成分として作らせることに成功した。現在マウスに食べさせて効果を確認中だ。」との事、「謎の病気」とされたアルツハイマー病だが、そのメカニズムは次第に明らかになってきた。この病気の克服に向けた科学者の闘いは最終ステージに入りつつある。」とコラムの記事は結んでいる。

アメリカ大統領レーガンは大統領の任期を終えてからTVで国民に向かい「私はアルツハイマー病にかかった」としゃべったのち、全く人前にあられなくなり、つい先頃死亡し、立派な国葬が行われ仲の良かった中曽根元総理が国使として葬儀に参加したニュースもまだ耳に残っている。

誰が届けてくれたのか忘れてしまったが、「見る見るうちに記憶力が激烈に回復」と題する茨城キリスト教大学教授、医学博士板倉弘重氏監修の本が手元にある。その本によると、「アルツハイマー病の発症にはさまざまな要因が重なっているらしいこと、症状が現れる以前から水面下でゆっくり進行していることが分かっています。

これらのことから、現段階では痴ほうは治療するよりも予防することが大切だという意見があります。」と記載されている。

しのびよる痴ほうが予防できればそれにこしたことはないとは誰でも思うことだ。また、この本には「老人性痴ほう」と「加齢による物忘れ」の遠いとして次のことをあげている。

・良性老人性物忘れ

記銘力(新しいことを覚える)低下が主で、想起(思い出す)障害は目立たない。

物忘れを自覚し、探し物も努力してみつけようとする。

日時・場所などの見当識障害はない。

作り話はみられない。

日常生活に明らかな支障はない。

きわめて徐々にしか進行しない。

・痴ほう性健忘症

記銘力障害とともに想起障害もみられる。

物忘れの自覚に乏しく探し物も見つけようとはしない。

日時場所など失見当識が見られる。

作り話をする傾向がある。

日常生活に支障をきたす。

進行が早い。

と記載されているので、私自身をこのものさしにあてはめてみれば私の物忘れはごく初期の老人性物忘れであって大して心配したことでもないとの結論が得られた。しかし、誰でも死ぬまで健康でありたいと希望するのは当然のことである。そこで、最近は一サントリーがゴマを基にした「セサミンE」とか日新製粉の「パワーリブロン8」とか薬ではない予防薬を健康補助食品とかサプリメントとか呼んで、テレビ通販、新聞広告が盛んである。ここに紹介した本も落ち着くところはサプリメントと実証例の記事である。

ここまでくるといささかこの本の記載の信憑性が疑わしく思われるが、冒頭に記載した新聞記事でも「ワクチン食べて発症防ぐ」とあり、サプリメントも同じことを目ざしているのだから無責任な言い方だが一応この本に宣伝紹介されている「記憶コリン」という商標で発売している健康補助食品の成分を紹介する。「痴ほうや記憶力低下を改善するために、また記憶力の増大や学習効果アップのために開発されたもので、卵黄や大豆から抽出したホスファチジルコリンを主成分として、ビタミンB12やイチョウ葉エキス、DHAなどを複合的に配合した、脳内活性化のための栄養食品です。」とある。

ところで、この記載を信じて服用した人が、さっぱり効果がなかったらどうなるのだろう。納得できないことで不満がのこる。

このような不満がのこるような本が大手を振って本屋の店頭に並ぶのはゆるせない。そこでこういうケースをとり締まる法律がなかろうかと、公正取引委員会（以下「公取」という。）の審決を見ていたらあった、あった。

アメリカ製のネズミを撃退・駆除するネズミ撃退器について、広告に記載されているような性能、効果がないのに著しく優良であると一般消費者に誤認される表示をしてはならないという趣旨の審決があった。

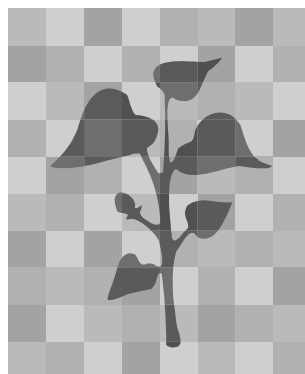
この審決は「景品表示法」、通常は「景表法」と云われる法律でその4条1号を適用した審決である。ここに「景品」というなじみのない文字が使われているが「商品」の意味で、「商品」の広告、宣伝等の表示に関する法律である。

公取で審決が出れば出版社はそれにしたがうだろうが、高いサプリメントを購入した家族はそれではおさまらないだろう。

その場合には民法709条には故意または過失によって他人の権利を侵害して損害を生じた場合には、被害者（家族）は加害者（出版社または著者）に対し損害賠償請求権を行使することが出来るとされているので、最終的には不満を鰐消できる筈である。

もの忘れからやゝあさってを向いた話になりましたが、ひょっとしたら私はもの忘れよりアルツハイマー病の中に少しばかり脚を踏みこんでいるのかも知れない。おう、こわ、こわ。

平成16年8月31日 記



「アコンカグアの白い風」 出版夜話

舟橋 栄子 (PA会)

仕事のほかに何か息抜きを持ったほうが良いという先輩の助言から始まった山登りが、ただ登るだけでは飽き足らなく、ビデオカメラと三脚を持参するようになりました。百名山や三百名山の登頂、七大陸制覇といった世の中の風潮に逆らって、一つの山にこだわることから始まった山登りも、二十年ちかくなり、国内の山だけでなく最近では海外にも出かけております。ビデオカメラで撮影し、編集し、ナレーションやBGMもいれて映画にもまとめてみました。しかし、映像だけでは伝わらないものがあることに気づきました。例えば、風で運ばれるその土地特有の臭い、食物の味などはカメラで捕らえることは出来ません。また感情豊かな人々との交流などは、狭い四角の画面に入りきるものではありません。文字も重要な媒体です。

2001年の暮れから2004年の正月までの3回の南米最高峰アコンカグア登山の記録をまとめてみたいと思い立ったのが1月の後半でした。同行者や山で出会った人たちに呼びかけて一人につき原稿用紙百枚前後を書いてもらい文集でいどのものを考えていました。平日は仕事で手一杯ですから、完成まで全土日を編集作業に使いました。執筆者の選定、依頼、懇願、特に3月末の締め切り日までの原稿の収集等、明細書を書く仕事とは違い初めはとまどいもありました。集まった原稿は中身の濃いものが多かったものですから、内輪だけで回覧するようなものではなく、広く山を知っている人は勿論のこと、山を知らない人にも読んでもらいたいと、編集方針も変わっていきました。簡単な内容の紹介を加えて目次をつくり、新聞社や出版社の知り合いに意見を聞き、最終的には山のことは山専門の出版社が良いということになり、ゴールデンウィーク明けに知人を介して持ち込み、山と溪谷社から出版してもらうこ

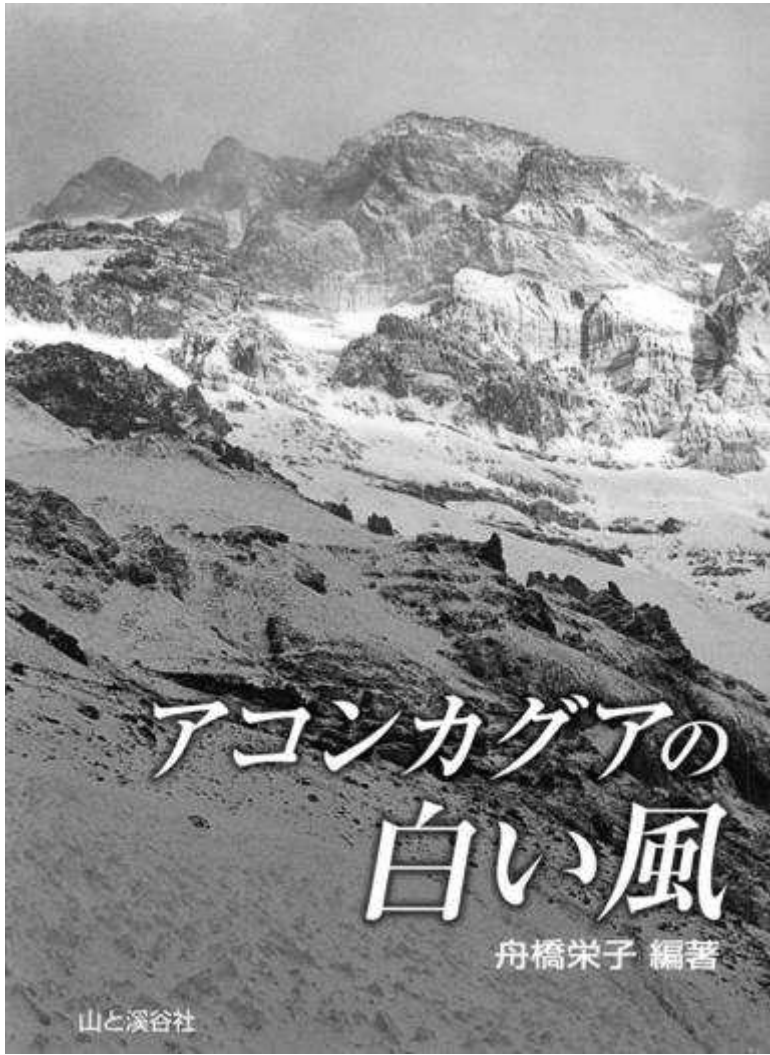
とになりました。

出版業界も世の中の好景気不景気の影響を受け易く、業界の合併や再編成、離合集散も多いようです。売れる本かどうか出版の判断材料になり、特に有名人が書いたものが優先されます。一方、最近では本でも出そうかと出版社に持ち込む無名人が増えてきて、編集者は3ヵ月先まで読まなければならない原稿が机上に山積みになっているそうです。アコンカグア登山は12月から1-2月がシーズンですから、逆算すると8-10月には日本からの格安チケットの飛行機の予約が必要です。7月には出版されていないと山行計画には間に合いません。印刷所は3ヵ月の余裕がほしいと言います。ようやく7月26日が発行日と決まりました。

餅は餅屋でと、ビデオ関係の出版社を退職したばかりの知人をお願いして専門家からみた細やかな編集や校正、出版費用の交渉までしていただきました。そのため、内容も素人ばなれし、誰でもが読んでいて楽しくなるものに変身し、費用も通常よりは低く抑えることができました。それでも、毎年2回は出かけていた海外山行も今年は中止し、仕事に専念しなければなりません。

山の醍醐味は、なんといっても、頂上に立ったときの感動が次の山に登りたいという引き金になることです。そして、その感動が仕事への源泉ともなるようです。両立の出来る限り山行は続けたいものです。

「アコンカグアの白い風」は日本弁理士協同組合 (FAX 03-5772-8034) で取り扱っています。割引価格1,800円 (定価2,000円) 送料実費



「はっぴょん」をよろしく

鴨田 哲彰 (PA)

日本弁理士会には、「広報センター」がある。弁理士会の「広報」といってもピンとこない先生方も多いだろう。私自身、昨年ここに配属されて、一年活動をしたが、何をするとところかさっぱりわからなかった。昨年度末に、正副会長会主催の広報に関するシンポジウムが行われ、パネラーの話聞いて、広報とは何かの初歩的なことがやっとわかったような気がした。気がしただけで、理解したとは言い難い状態で、本年度は広報センター長として活動しなければならないこととなった。

「広報センター」は4つの部会に分かれて活動している。第1部会は、皆さんもご存じの「Patent Attorney」の編集発行、第2部会は、小中学校に配布する「はっぴょん通信」というポスターの作成、第3部会は、「記者懇談会」というマスコミ相手のアナウンス活動、第4部会は、日本弁理士会のHPの管理運営をそれぞれ行っている。このように、「広報センター」の役割は、日本弁理士会の活動、そして弁理士個人の社会的活動について、社会に広く周知させるということにある（と思われる）。

つまり、弁理士という存在を社会的に認知させ、「弁理士って便利屋？」などと揶揄されることなく、弁理士や医者らと同様に広く国民に親しまれる存在に育て上げるための活動である。たとえば、今ネットショッピング等で、職業が尋ねられるが、選択欄には「弁護士・医師など」とあって弁理士という選択肢はない。これをしっかりと「弁護士・医師・弁理士」としてもらおうと。

むろん、単にわれわれの業務やそして個人個人の業績をいくら叫んだとしても、弁理士の地位が向上するわけではない。日本弁理士会は公益法人であり、そして弁理士という資格には社会貢献を果たすという義務が内包されている。日本弁理士会の委員会活動や日弁の諸活動に参加してみないと、こうしたこ

とはなかなか理解できないかかもしれないが、知財法が豊かな社会の発展を目的としているのと同様、弁理士もその目的の中に組み込まれている以上、その目的に資するだけの活動が予定されているのである。その対象は、対庁、対クライアントだけではなく、広く社会一般といえる。直接的な対外活動をしている「広報センター」や「知的財産支援センター」だけでなく、実務委員会をはじめ、日本弁理士会の活動はそうした理念に基づいて活動すべきであり、活動していなければいけない（そうである）。

「広報」の重要性が認識されるにつれ、「広報」は単なるスポークスマンではなく、「広報マン（ウーマン）」としての活動も望まれつつある。つまり、単なる日本弁理士会の活動を宣伝するだけではなく、マスコミと人脈を築いたり、社会に積極的に日本弁理士会を知らしめる活動や人材を自ら発掘したりすることが求められている。

残念ながら、「広報センター」は少数精鋭で、かつ、センター長が頼りないので（センター長が有能な方がよいが、ダメでも各部会が勝手にやってくれることがわかった。各委員に感謝）、すぐに優れた広報機能を発揮するには至らないと思われるが、今後は「広報センター」の重要性はさらに増すと思われるので、日弁の先生方、特に、マスコミ業界と人脈を気付きあげたいとか、自分の存在を社会に認めさせたいといった野望をお持ちの若手の先生には、積極的に「広報センター」の委員となることを希望してもらいたい。そこまでする気はないよというのであれば、せめて「はっぴょん」ストラップを携帯電話につけて、小さな子供たちに「はっぴょん」をエサに、「おじさん（おねえさん）はねえ、弁理士っていうんだよ」と話しかけて頂ければ幸いである。最後に、「べんりしかい」とタイプして「便利歯科医」と変換されない世界を目指そう！「はっぴょん」をよろしく！

スキー雑感 (または中年男のスキー回帰)



藤谷 史朗 (P A)

私は昭和20年代後半の生まれであるが、同世代の多くの男性は、みな青年のころに、程度の差はあっても一度はスキーに縁があったことと思う。

若いころのスキーは、とにかく自己流で、ひたすら滑り、ひがな一日中滑り、夕ご飯を食べてはまた滑り、少しくましく滑れるようになったと思えば、満足感に浸っていた。

スキーを始めたのは、高校2年の冬に父親に連れられて、越後中里の駅前スキー場に1, 2泊の民宿泊まりで行ったのがきっかけだった。最初に父親から、スキーをハの字に開いて制動するボーゲンという滑り方を教わり、初日に一応上から下まで降りてこられるようになり、翌日は回りながらスキーを揃えて止まれるようになってスキーに興味をもった。

大学時代は、金銭的余裕がなかったので年に1, 2度程度行くだけだったが、卒業する年の3月に、大学の白馬ヒュッテに5日間程泊り込んで、スキー三昧の生活を味わった。白馬ヒュッテは、白馬山の近くの梅池スキー場の中にあり、この梅池スキー場の馬の背コースは、その名の通り山頂からの馬の背のような尾根にあって幅がとても狭く、下の方は片斜面となっていて、そのころは毎回滑る度に度胸を試される気がしていた。山頂から反対側に降りると梅の森グレンデがあり、これは穏やかな林間コースのようになっていて、一番下の鐘の鳴る丘グレンデに繋がっていたように記憶している。このころは毎日滑っても、翌日体が痛くて言うことを聞かなくなるなどということはなかったような気がする。思えば、この白馬ヒュッテへの泊り込みで自称二級の足前となり、その後現在まで、さほど滑りのレベルは上がっていないようである。

大学を出て入った会社では、やっとももらった給料でさっそく安い国産のスキーセットを購入し、同期入社の人と連れ立ってスキーに行くようになった。

主に上越の越後中里、越後湯沢、石打あたりに行ったが、スキー行きに慣れてくると上越の雪の重さが気になるようになり、長野の志賀高原や、山形の蔵王にも行くようになった。遠くのスキー場に行くときは、ホームで夜中近くまで順番待ちして夜行列車に乗り込み、車両の床に新聞紙を敷いて寝て、明け方にスキー場に着いたら少しだけ仮眠してからその日一日滑っていたように思う(なにしろ20年以上前なので記憶が定かでないが)。

蔵王では、横倉の壁と呼ばれている斜度38度の斜面で、途中までは何とか降りたものの堪え切れず転んで、頭を下にしたまま背中で斜面の下まで滑り落ちたり、ロープウェイで上った地蔵平で霧にまかれて数メートル先も見えなくなり、一緒に行った皆とおびえかつ励まし合いながらだいぶ降りてきたところ、霧が風で吹き払われたら目の前にロープウェイの駅があって脱力したりした思い出がある。

その後、最初の会社を辞め、親類の会社でエンジニアとしての修行をしている間はスキーとは縁が切れていたが、現在の事務所に入ったら、競技者級の足前の人を含めてスキー好きがたくさんおり、さっそく仲間に加えてもらった。ところが、これで楽しいスキー生活を再開できると思ったらそれもつかの間、なにやら勉強をして試験を受けたほうが良いと言われ、またもスキーを絶たなければならないかと暗澹とした。

しかしながら事務所には、幸か不幸か勉強をしながらスキーも続けている先輩方がおり、私もつい自分に都合の良いほうへ同意したのであった。ところで、やはり学問に王道なしと言われる通り、私に関してはその選択の結果は長期間の受験生活に繋がることとなった(もちろん一番の理由は、生来の勉強嫌いにあるということは承知しているが)。

従って、これから受験する人には、私のような選

扱は受験生活が長引いても良いならという条件付で勧めることにしている。悪いことばかりではなく、スキーは、受験勉強で煮詰まった時のストレスを一時的に解消するには役立つように思われる。本質的なストレス解消は合格することであるということはもちろん判っているが、多く人はそれほどタフではないので、壊れてしまう前に少しずつでもストレス解消をすることは人生の知恵ではないか、などと思っもいる（話が逸れてしまった）。

試験に無事受かった後は、心置きなくスキーができるはずであったが、子育てや、資格を取ったことでの環境の変化などにより、数年前までなんとなく事務所の年1回のスキー旅行だけに止まっていた。それが、PA会のスキー同好会のスキー旅行に参加することになり、ひさしぶりに年に2回以上スキーに行くようになった。

さっそく流行のカービングスキーを購入したが、問題はスキーウェアである。大昔に大枚をはたいて買ったスキーウェアはもちろん体が入らず、スキー用品店で探しても体の入るものは殆どない。それゆえ選択の余地はなく、とにかく着られるものを買うしかないので、当面は新調するのを見送っている。

ちなみに今使っているのは、だいぶ前に買ったもので雪国の人の普段着なのではないかと疑っている。スキー靴についても同様に、体型とのマッチングの問題があり、ふくらはぎの外径アップに起因してバックルの締め付けが困難であるのに加えて、靴を履こうとする度にお腹がつかえて息が切れ、まるで拷問を受けているようである。

また、以前と大きく変わったと認識したのは、体力と気力の点である。中年になってなんとなくそうではないかと思っていたのだが、事実として突きつけられると目を逸らしようがない。先ず、一日滑ると翌日は基本的に休養日である。体が動かたがらないのである。なさけないことに、筋肉痛はさらに後の日に出てくる。そして疲れと筋肉痛が重なると、せっかく滑れる環境に来ているのに気力が足らず、滑らなくてもいいやと自分を説得してしまう。

かくして、スキー回帰した中年男は、スキーに来た最初の日以外はスキー場で、お茶もしくはアルコール飲料を飲みつつ、雪山を眺め愛でて時間を過ごすのである。

それもまた大人の優雅な楽しみとも思えるのであるが・・・。



(今年のPAスキー旅行会 in 尾瀬岩倉にて。後列左から2人目が筆者)

競技スキーの魅力



中野圭二 (P.A.)

競技スキーをしているという、「雪国の出身ですか?」とよく聞かれる。しかし、私の出身地は雪とあまり縁のない瀬戸内の岡山県である（県内にスキー場はありますが）。次に、「どのような競技ですか?」と聞かれるので、「大回転や回転です。」と答えると、「ああ、くるくるっと回る・・・」と、縦にクルクル回るしぐさをするのである。たいていの人が、フリースタイルのエアリアルと勘違いしている。

「いいえ、ポールを立ててその間を滑る競技です。」と説明して、やっと理解してもらえるのである。スキーの大回転や回転は、冬のオリンピックでは花形種目であるが、一般の人にはあまり認知されていないのだと感じる。

私がスキーを始めたのは、学生時代（ちょうど、「私をスキーに連れてって」が上映された頃）である。この頃から競技には興味を持っていて、ゲレンデにラクチャレンジ（お金を入れるとタイム計測される常設ポール）があると時々タイムアタックをしていた。その後、就職して岡山に戻ってからは基礎スキーに目覚め、バッヂテスト（1級、2級と呼ばれるもの）を受けまくった。当然、何度も落ちたのである。どうやら、私には基礎の難しい理屈は合わないらしい（それでも何とか1級までは取得できたが）。

そして、本格的に競技スキーを始めたのは6年位前である。新聞に近所のスキークラブの紹介記事が載っているのをみて、競技スキーもやっているというので、すぐにそのクラブに入会した。このクラブでは特に競技の指導者はいなかったため、連休等を利用して北志賀よませの海和スキースクールまでポール練習をやりに行っていた。競技のスクールでは、ポールの中を如何にして早く滑るようになるかということがテーマであり、シンプルで分かりやすいものであった。また、練習の成果がタイムという

客観的な数値に表れる（主観的な評価のバッヂテストとは大きく異なる点である）ことから、目標がはっきりして練習していても楽しい。最も競技スキーをやっているのは、誰にも邪魔されることがなく思い切り飛ばして滑れるところである。

近頃は、カービングスキー板の出現により、誰でも手軽にカービングスキーを楽しめるようになったので、パラレルターンができるレベルなら十分にポールの中を滑ることができる（勿論ボーゲンでも可能ですが）。普段何気なくターンしているのに対し、ポールで規制されたバーンで自分の思い描いたターン弧に近づける練習は、スキー操作の技術の向上にとっても役立つと思う。最近ではスキーブームも去り、どこのスキー場もお客を集めるのに必死で、競技スキーヤーの獲得のためにポール専用バーンを設けたり、常設ポールをセットしたりと、気軽にポールの中を滑ることができるので一度滑ってみると良いと思う。

弁理士試験に合格して東京に出てきてからは、都連に加盟しているスキークラブに入会して都連の大会に出場している。人口が多いせいか東京都だけは、国体予選に出場するのに足切りがある。都連1年目はこの足切りにかからないようにするのが目標で、この目標は1年目に無事クリアできた。しかし、ここ2年は年齢のせいか？怪我のせいか成績が伸び悩んでいる。こんなできの悪い生徒に文句も言わず指導してくれるコーチ（元ワールドカップのレーサー）のためにも練習に励み、「いつかは国体出場！」を目指して、これからも競技スキーを続けていこうと思う。

忍耐の限度



石原 詔 二 (無名会)

弁理士という職業上からか、人（多くはクライアントであるが）と待ち合わせることは結構多い。こちらからクライアントの会社に行ったり、また、クライアントが当方の事務所に見えたりする。クライアントが当方の事務所に見える時は、早く来ようが遅く来ようがあまり問題は発生しない。中には時間を間違えて1時間早く到着したり、又は道に迷って30分以上遅れて到着する人などもある。しかし、こちらはその日が事務所で仕事する日であれば、1日中事務所にいるわけであるから、30分や1時間の時間のずれは、あまり問題とすることも無い。もっとも、20年以上毎年2回、当事務所に見える米国弁護士がいるが、この弁護士は、計ったように1分の狂いもなく正確に事務所に着くので、感心を通り越して毎回感嘆している。

こちらがクライアントのところへ訪問する時もほとんどの場合、問題はない。事前に訪問時間を決めておき、受付の人に来意を告げれば、応接室や会議室に通され、ほどなく、通常は1～2分待つとクライアント（会社の担当者や中小企業であれば社長さん等）と会って相談や打ち合わせを行うことになる。しかし、中には、ずぼらな人がいて、こちらが応接室で待っているということを知りながら、どうい理由か知らないが、出てこない場合がある。このような場合には、自分の忍耐の限度が試されることになる。私の経験では、忍耐の限度を超えたことが2度ほどある。

1度目は、相手は中小企業の社長さんで、新しいアイデアを考えたので特許出願をしたいという内容の電話で、会社の方へ来て欲しいということになり、訪問日時を決めた。こちらは初めてのクライアントでもあり、決められた時間に正確に訪問した。受付の女性事務員に、社長さんとの約束で訪問した者で

ずと言って、通常ของบริษัทのように、応接室に通された。ところが、その後何の音沙汰もなく、5分経ち、10分経ち、その間その事務員にまだ見えないがと言っても、まもなく見えると思いますというだけでどうしようもなく、正確な時間は覚えていないが15分位経過したところで、我慢しきれなくなって帰ってしまったことがある。2、3日後になって、その社長が当方の事務所に謝りに来たが、結局は出願の方はしないことになった。

2度目は、長年つきあっているクライアントの会社で、いつもの出願依頼の部門ではなく別の部門の人が発明をしたが、その発明者本人は地方にいて東京に出てこれられないので、その部門の担当部長が発明の内容について説明するから、会社の担当部に来て欲しいということで、約束の日時にその会社を訪問した。やはり受付で来意を告げると応接室に通された。また、何の音沙汰もなく、5分経ち、10分経ち、その内こちらも受付にまだ見えないがどうしたのかと尋ねたが、その部長以外の社員が出てきて、部長は今電話をしているので、少し待つて欲しいということだったが、なかなか出てこないで3～4回はまだかまだかと催促し、「そもそもこちらは約束の時間通りに来ているのだから、その時間にその部長さんに用事があるのであれば、別の時間に約束すればよいことでしょう。」などと文句を言っていたが、その社員は平身低頭するのみでした。相当頭にきていたので、本当は帰りたかったところであったが、やはり長年のクライアントであることを考えて帰らずに待っていたところ、20分経過した頃になって、その部長があらわれた。同じような文句を言ったところ、まあまあとかで済まされて、結局のところ、その発明の内容の説明を聞いて帰ったことがあった。

最近、次のような文章を読んだ。

「アメリカの文化人類学者エドワード・ホールは、「待つ」ことの意味が民族によって、いろいろにちがっている実情を興味深く報告しています。それによりますと、アラブ人にとっては「これはアラブと言うよりヘブライ人をふくめたセム系の人間と言ったほうがいいと思います」が「長いあいだ待つ」と、「非常に長いあいだ待つ」ことに、ほとんどちがいが無いのだそうです。つまり、彼らはそうした「時」の区別をしません。

ところが、アメリカ人にとっては、30分というのが忍耐の限度であり、彼らは30分も待たされるということを、腹を立てるのに十分な仕打ちだと考えます。そこで、そのようにせっかちなアメリカ人は、のんびりとした南米の国々でイライラし、ジリジリし、カッカとし、笑うに笑えぬ喜劇を演じるようになります。

ホールは、ラテン系のある国のアメリカ大使館に館員の一人として赴任したアメリカ人の農業専門家の例を報告しています。それによりますと、彼はや々と面会の約束をとりつけたその国の農業担当大臣に会うべく、約束の時間のすこし前に行って待っていたのだそうです。ところが、当の大臣はなかなか現われません。5分たち、10分たち、15分たったのに出でこないものですから、彼はイライラして、秘書に、自分は控室でこうして待っておりますから、と何度も念を押しました。

むろん、大臣は承知していたのです。が、さらに20分たち、25分たち、30分たっても現われませんでした。こうして45分経過したときに、ついにこのアメリカ人は血相を変え、「こちらは約束の時間に来たのだ。それを45分も待たせるなんて失礼きわまる。こんな目にあわされるのはもうたくさんだ！」と秘書にくっかかり、席を蹴って帰ってしまいました。やがて現われた大臣は、そのことを秘書からきくと、吐息とともに、こうつぶやいたと言うのです。

「ああ、またか。いつものことながら、アメリカ人というのは、どうしてこうもわきまえないんだろう」
(E・ホール『沈黙のことば』)

つまり、この国の大臣にとっては、アメリカ人の「5分くらい」にあたるのが、「45分」だったのです。

もしアメリカで、5分待たされ、「5分も待ちぼうけを食わされた」と腹を立てたとしたら、その人は大人げない非常識な人間と思われることでしょう。それとおなじように、この大臣には、たった45分ぐらい待っただけで、ぷんぷん怒って帰ってしまう、などということは、とうてい考えられないことなのだ、とホールは記しています。

(森本哲郎「ことばへの旅」)

この南米の話には衝撃をうけた。自分の経験した上記2つの事例については、当方に全く非はなく、相手方が礼を失っており相手が一方向的に悪いもので全く怪しからん話だと、その後もずっと思っていた。ところが、この南米の話聞いた後は全く逆転の発想で、自分の方がわきまえないと非難される立場に置かれていたのかもしれないと言うことに始めて気がついた。自分の場合、今でも食堂で注文してから5分も待たされたら、イライラして催促したり、注文取りにくるのが少しでも遅いと、カッカしてそのまま帰ってしまったりしているのであるから、食堂の人からみれば、その位の待ち時間でイライラ、カッカするのはわきまえないと思っているのかもしれない。私が問題にした2人の人達は、南米や中近東であれば、私を待たせた程度の時間、人を待たせても問題はないわけで、日本では生活上のトラブルがあるかもしれないが、南米では何の問題もなく一生暮らしていけるわけである。その文化人類学者が日本人の忍耐の限度を測定したら何分と出るのだろうか。自分の場合は、このような話を聞いたとしても、一人で待たされたらやはり精々10分が限度であろう。皆さんもそれぞれ自分の忍耐の限度を測定してみるのも一興でしょう。

ところで、忍耐の限度を超えるとはどういうことなのであろうか？「自分の存在の形になじめるか？なじめないか？それが哲学の問題」(鶴見俊輔)という言がある。通常の場合、ほとんどの人は自分の存在の形になじんでいて大過なく日常生活を過ごしており、自分の存在の形になじめない一部の人が種々の出来事(良い場合は新規事業等、悪い場合はトラブル等)の原因となる。自分の場合(上記したアメリカ大使館員も同じ)でいえば、自分の存

在の形になじんだ状態で面会時間を設定したにもかかわらず、待ち時間の経過とともに自分の忍耐の限界を超えさせられ、換言すれば、相手が約束の時間に現れないということによって自分の存在の形になじめない状態に否応なしに叩き込まれたわけで、その結果、異次元空間に突入して前後の見境がなくなり、冷静な他人がみるとわきまえのない行動をとることになってしまった。これが忍耐の限度を超えるということの実態であろう。忍耐の限度を超えると、人間は前後の見境がなくなり、相手に対して非礼なことを平気でやるようになる。私の場合は、私の方が正しくて相手方の二人とも一応は自分の落ち度を認め、当事者双方の認識が一致しており、このような場合は問題がない。アメリカ大使館員の場合は、大使館員は自分が正しくあいては非礼であるということに怒り心頭に達しているわけであるが、相手方の大臣の方はアメリカ人はわきまえを知らないと言ったとしても怒っているわけでもなく、即ち、当事者の認識は一致していないが、一方の当事者は自分の存在の形になじんでいる状態であるからからそれほど大きな問題ともならない。問題は当事者双方が忍耐の限度を超え、即ち、自分の存在の形になじ

めない状態となってしまうている場合である。私のケースで言えば、例えば、約束の時間から5分経過しただけで相手方が出てこないといって腹を立てて帰ってしまった場合、相手方も5分待たせた位で帰ってしまうような気の短い人とは今後一切付き合わないというように腹を立てると、双方が自分の存在になじめない状態となり、この場合は問題となる。この忍耐の限界を超える現象は、待つというような時間に関連して生じることもあるが、時間以外の原因でも当然おこりうる。現在世界で起きている紛争、イスラエル vs パレスチナ、ロシア vs チェチェン等は紛争当事者の双方が既に忍耐の限度を超えてしまい、自分の存在になじめない状態であり、つまり、前後の見境がない状態であり、第三者から見るとわきまえがないどころか自爆行為等の想像を絶したテロ行為や人道を無視したテロ鎮圧行為が行なわれており、まさに憎悪の連鎖といえる。わずかな待ち時間の多少でイライラ、カッカするなどということは、自分の存在に多少なじめない程度のことであってたいしたことではない。

以上



台北旅行記（初めての亜熱帯）



神田正義（無名会）

御担当の先生に、日本弁理士クラブの会報に論文や勉強会の報告等なにか書けとご指示を頂いて、さて不勉強な私が何を書けばいいのか迷っておりましたところ、いつのまにか締め切りが近づいてしまいました。

折良く、9月に、私は、台湾へ旅行することになっており、その顛末を報告します。その台湾旅行は、私の勤める事務所の所内旅行でして、所長や同僚たちと一緒にのツアーであります。

私は、生来不精で、旅行等の計画を立てたりするのが苦手です。さて、台湾へ行くとなっても何の用意もせず、「まあ皆にくっついていけばいいか」という程度の軽いノリでした。

旅行会社の手配した航空会社は、チャイナエアライン。成田から午後2時過ぎに出発のはずが、2時間も遅れて4時過ぎに出発するとのこと。搭乗機のB747の整備都合だということです。そんなわけで、飛行機の出発までに時間がかかりまして、空港への集合が出発予定2時間前の12時で、挙句の果てに4時間遅れの出発となり、台北に着いたのは現地時間で午後8時（時差が1時間遅れだそうです）。ガイドさんとの挨拶もそこそこに、大慌てでレストランへ直行しました。

なお、台北（タイペイ）の国際空港は、皆さんご存知のとおり、中正国際機場（国際空港）といいますが、中正は、中華民国初代総統の蒋介石氏の「号（ごう）または字（あざな）」だそうです。私が読んだ三国志などで諸葛亮・諸葛孔明の孔明が「字（あざな）」と言うものだったと思います。そのためかやたらに「中正」と名のつく道路や地名がありました。同様に、孫文氏の字は「中山」であり、この「中山」の付く地名もたくさんありました。

飛行機の遅れでホテルにチェックインせずに直行

したレストランが「欣葉台菜」（チェーン店がたくさんあり、欣葉台菜雙城店だと思います）です。

頂いたのは、肉・魚・野菜のコース料理（何のコースだかさっぱり分かりませんが、恐らく値段によってきまるお任せコースでしょう）、とにかくおなかもすいた夜9時過ぎ、台湾ビールと紹興酒をがらがん飲んで、料理に舌鼓を打ったわけです。料理全体はさほど辛くなく、肉魚の揚げ物・炒め物が全部美味しく、特に「空菜」の炒め物と生姜湯でゆでた蛤のスープが私的にはさっぱりして非常に美味しく感じたしだいです。

その日の宿は「ホテルグランドハイアット台北君悦大飯店」でした。申し分のない居住性がありました。何人かの人は夜の街へ台湾式マッサージ（極めて健康的とのことでした）を受けに出発したようですが、私はホテルそばのコンビニで買出しをし、シャワーを浴びた後、コンビニで買ったビール（一番絞り）を飲んで就寝しました。

翌日は、孔氏廟から総統府を車窓から眺めた後、中正記念堂（つまり蒋介石総統をたたえる記念館です）を見学しました。蒋介石（蔣中正）氏は「国父」とされ、5m以上の台座の上にゆったりした椅子に腰掛けた7～10mはあろうかという像が安置されています。そこでは蒋介石氏の像の前左右で警備する儀仗兵の交替式を見物したものです。この中正記念堂は、もと日本軍の兵營の跡地に建てられたものとのことで、台北市の中心部に広々としたスペースを取って建造されています。

中正記念堂を後にして、故宮博物院を見学。ヒスイなどの「玉」や象牙を加工した品々（その細工の技巧や技術にビックリしました）をガイドさんの説明を聞きながら拝見させていただきました。この故宮博物院は、「蒋介石」氏国民党が大陸から台湾に出

て行くときに北京の「紫禁城」の宝物を持ち出したもので、大陸の「故宮博物院」の収蔵品に比較して圧倒的な物量を誇るそうです。共産党に押し出されようとする国民党の意地がなした業かとも思った次第です。収蔵品が多すぎてほんとはもっとゆっくり見たかったのですが、その他はまたの機会として、台北市内のレストランへ昼食を採りに移動しました。

昼食は、有名な鼎泰豊 (Ding Tai Fung Restaurant) で小籠包を頂きました。飲み物はまたもや台湾ビール！ アツアツの小籠包で口が火傷しそうになるのを冷たいビールで冷し次の小籠包を口に運ぶことを繰り返しました。店にはツアーとして予約したにもかかわらず、30分待ちで、席に座ると次々と小籠包が出てきます。直系25cm程度のせいろ(蒸籠)に10個程度の小籠包が入っており、5人ですと3段ぐらいの蒸籠が出てきます。小籠包は、薄い皮で包んだ肉饅頭と考えられ具とともにスープが入っていて、具とスープが薄い皮を通して透けて見えます。ガイドさんの説明によれば、皮の上のひねってとじてある部分をうまく摘んで、皮が破れないようにして蒸籠からレンゲの上に乗せて、そのまままたは種類によっては醤油に付けて食べるとおいしいとのこと。取るときに皮が破けずに良かったのですが、ゆっくりと食べているとスープと具が冷めてしまい、味が落ちるような気がします。火傷しそうなほど熱いのを口に放り込んで、ビールでがらがん流し込んだほうが美味いとなるわけです。

昼食後は、自由行動で夜の市街の見物に繰り出すということになりました。

私は、台湾には何の下調べもせずに来ましたので、ガイドさんの紹介するレストランに行こうというオプショナルツアー組に入りました。

そのオプショナルツアーまでには時間がありましたので、ホテル近くに「101タワー」と「三光三越」等があるとのことのみやげ物を見に同室の人と出掛けたのですが、結構距離があり、いい運動になったと思います。まず「101タワー」に向かって歩いていきましたが、残念ながら、これは最大地上高500mのタワーのある本館部分はまだオープンしておらず、その側部にくっつくように並設された商業ビルしか

やっていないので、外観だけ見て終わりました。「101タワー」はちょっと変わったデザインビルで、全体が横断面正四角形を呈し、途中までは先細りなのですが、それ以上いくと逆に上広がり外観で途中階まで続き、一旦細くなって再度上広がり階が続きます。ちょうど、四角錐の上に逆向きの四角錐を複数重ねた形状といえますか、開口部が四角い小鉢を重ねた形状といえますか、変わった外観であることは間違いありません。また、全体の色も「ヒスイ」様の透き通ったような青緑色を呈しています。

次に「三光三越」に向かいました。この店内は東京の三越と変わらない雰囲気とくにブランド品に力を入れているようでした。ただ、建物が四棟も建っており、全部は見切れませんので、9号館の地下の食品街だけ見物しただけです。その後はホテルに帰ってオプショナルツアーの時間までテレビで「プレミアリーグ」を見ておりました。

さて、オプショナルツアーの時間となりました。行きはレストランを経由して夜市までバスで送ってくれるとのことでした。レストランは名称を「金〇満堂飯店」といい、仲間内ではかなり受けました。インターネットで調べたところ、結構有名な店らしく何件か紹介するサイトにヒットしました。そこでは湖南料理を出しており四川料理ほどではないがピリ辛の料理を賞味いたしまして、またもや、台湾ビールと紹興酒を頂いた次第です。

食後は、夜市に繰り出そうということで「士林(スーリン)」の街にバスで送ってもらった次第です。食事はすんでしまったので食べもの屋に入るのは遠慮し、とりあえず街を見ようと中央の道を歩いていったわけです。

最初は街の賑わいが「年末のアメ横」みたいだなと思ったのですが、道を進んで行くと道の真中に店が出ていて衣類や饅頭などを所狭しと並べており、邪魔でしょうがありません。挙句の果ては、前方からは足の悪い所謂物乞いが松葉杖を突きながら鍋を持っておぼつかない足取りで進んでくるのです。人の流れの逆方向に進んでくるので、道行く人はいやでもその物乞いに会うことになります。プラカードを胸の当りに掲げていて、漢字の意味だけを拾って

見ると「私は2年前になにも悪いことをしないのに足を悪くして家族を養えなくなった云々」と思われることが書いてあり、自分が以下に善良で施しを受けるのに値するかの文言を宣伝しているのです。そういえば、士林の街路の入り口にも楽器を演奏する車椅子のおじさんがいたようでこれも物乞いかと考えられます。そんなわけで、一同街を見物し終わると、疲れたからといって早々にホテルに帰ることにしました。

私は同室の人と一緒にまたもやコンビニにビールを買出しに行って、ビールを飲みながら「プレミア

リーグ」を鑑賞した次第です。

翌日は、仏教+道教のお寺の「龍山寺」を参拝して中正国際空港に向かい日本への帰途に着いたわけです。

今回の旅行は何の下調べもせずに臨んだわりには面白かったと言えます。比較的旅費も安そうなので、今度は家族とでも来ようかと考えた次第です。

ただ、もっと楽しみたかったので、次回は、中国語をもう少し習って、大陸のほうにも合わせていけるようにしたいとひそかに目標を立てた次第です。

以上



「なぜ走るのか」



鶴目朋之（無名会）

1. きっかけ

私は、30を過ぎてから思い立って二輪免許を取得しました。一般的に多くの人がバイクや車に夢中になるような10～20代のころはほとんど目もくれず、突然この歳になって取る気になったのは、私自身にとってバイク＝ツーリング（旅）だったからにほかなりません。

以前の職場ではなかなか忙しく、教習場に通うどころではなかったのですが、突然転勤で神戸に異動することになり、そこでは時間的にもかなり余裕ができたので、めでたく二輪免許を取得することができました。

そして、二輪免許を取ったからには、いつか今の仕事も辞めて日本一週ツーリング、などと夢見ていたところ、絶好のタイミングで（？）その勤め先の会社が倒産してしまったので、晴れて自由に旅行できる身になりました。

2. バイクの旅の魅力（ツーリング）

ツーリングの魅力はなんといっても「いつでもどこへでもマイペース」だと思います。つまり、私のバイクの旅はある程度大雑把に向かう方面だけ決めておいて、あとはその時その時の天候や、道路状況その他もろもろでその日の目的地を決定します。つまり、「走ってみないと分からない」旅です。泊まる場所はどのようにするのかと思われるかもしれませんが、夏であればキャンプ、またどこか宿に泊まる場合も基本的に夕方までには連絡を入れれば、まず泊まらないということはありません。

こういう旅のスタイルでは電車などの交通機関を利用しないため、時間などに束縛されません。実際、一時は時計が壊れていて、携帯電話も持っていなかったため、時計無しで旅行していた時期もありま

した。キャンプのときは、暗くなったら寝て、明るくなったら活動開始すればよく、どんなに田舎でも人が生息している場所には必ず時計もあるので、意外と困ることはありません。

また、基本的に道さえあればどこでも行けます。とはいえ、ときには四万十川の源流までオンロードの大型バイクで行こうとして、狭い山道で立ちゴケ（止まった状態で転倒）し、結局断念したという失敗談もありましたが。

私にとってツーリングとは一人旅を意味するので、人にあわせることなく、あくまで自分のペースで走ればよいのですから、気楽なものです。まわりが自然に囲まれているときは一人でいても寂しいと感じることはありません。ただ、あまりに素晴らしい自然を目の当たりにすると、この感動を共有する人がいればいいのにな、と思うことはあります。

いつもツーリングをして思うのは日本の自然の素晴らしさです。有名な観光地よりもむしろ、人がめったに通らない山道などのほうが、日本の四季折々の表情を生で体験できる気がします。私自身はどちらかというところ、厳しさを感じるような自然が好きなので、その意味では今まで行った中では、四国が一番好きかもしれません。

自然をこれほどまで身近に感じられるのは、やはりバイクという乗り物の特殊性によるものだと思います。バイクに乗っている人間は基本的にむき出しのままなので、強烈な日差しや、雨風にさらされます。そうしますと、人間という存在は、普段いかに多くのものから守られているのかということを感じます。バイクで走っていると、たかだか雨でさえ防げないので、特に大雨ともなると、視界も悪く、スリップもしやすくなるので、危険さえ伴います。

ですから、ツーリングの間は、自然に対してかなり敏感になるとともに、少しだけ謙虚にもなります。人間なんて普段は大きな自然災害でもなければ、自然の脅威を感じることもないでしょうが、結局のところ、自然に生かされているのに過ぎないのではないかと、とさえ思います。

また、そうした無防備さは、逆にオープンさにもつながるので、人との接する機会も多くなります。旅行先の土地の人が、乗用車などに乗っている人に対してより、バイク乗りに対してのほうが、気さくに接してくれるような気がするの、おそらく、この乗り物のオープンな性格によるものでしょう。

3. これから

実は、この原稿の締め切り期限の日には、私は遅い夏休みを取ってツーリングにでかけているはずで、今回は久々の東北方面に行ってみようかと考えています。ツーリングを始めた当初は、なるべく遠くまで走ることに喜びを覚えたので、一日ほとんど休みなく走ってばかりでした。しかし、ここ最近はまだ少しゆとりができてきたというか、途中で観光

らしきものをする余裕ができました。前回の北陸、近畿のツーリングでは五木寛之の百寺巡礼の本を持参し、ツーリングルートに組み込めそうな寺を巡ってみたりもしました。

結局、私にとってのバイクとは、ドラえものの「どこでもドア」ならぬ、「自由への扉」ということができます。

人はみなそれぞれ人生の目標を持っているでしょうが、日々のルーティンワークの繰り返しの中で、そういう目標を見失ってしまったり、目標に向かう気持ちが萎えてしまうこともままあります。そのような時、ツーリングに出かけると、自分の進むべき道は自分自身の意志で決定することができ、そして、そのように自分で決めた目標は到達可能なのだ、ということをおぼろげに思い出させてくれます。

人生の目標などという大仰なものに比べて、ツーリングの目的地なんて取るに足りないと思われるかもしれませんが、私にとっては、こうしたささやかな「自由」や「可能性」を実感することが、大きな目標を達成するうえでは欠かせないのです。

以上



“五十肩”



保科敏夫（無名会）

1. 友人との出会い

先日、十年ぶりにある友人Tに出会った。その友人Tが言うことには、「ホシナさん、肩の辺りの盛り上がりがなくなりましたね」。私の上半身を凝視しつつ言う彼の言葉に、一瞬驚きを感じた。というのは、その言葉は、一般にいう「お腹が出てきましたね」とか、「太めになりましたね」という表現とは類が異なり、耳慣れない言葉だからである。しかし、その友人Tの言葉が、私に大きな刺激を与えることになった。

2. 肩の痛み／その影響

毎日パソコンに向かう私たち、特に、パソコンへの入力フォームの悪い者にとって、手首や肘に障害を生じることは当たり前。私の場合、仕事が過ぎると、肩の方に痛みを生じる。「四十肩」とか「五十肩」とは、四十、五十近くになり、肩の運動機能が低下することをいうようだ。この年令肩は、事務仕事によって加速されるのだろうか。肩の痛みは、私の最近の悩みの一つである。

そのような肩の痛みは、運動にも大きく影響する。長年卓球をやっている私だが、肩の痛みによって、その卓球が変化してしまった。ドライブを武器にした攻撃タイプの以前の卓球が、今ではつなぎを武器にして相手のミスを待つ守りのそれに変わった。その変化に伴って、試合で負けることが多くなった。

3. 筋肉の鎧をつけるぞ

頭の中に、「筋肉の鎧あるいは増強」によって肩の痛みに対抗できる、という知識はあった。しかし、知識が実践に結びつかないのが私の常。前に述べた友人Tの言葉は、「とにかく実践せよ」という強い動機づけになった。Tと会ってからしばらくした後で

はあるが、私は倉庫にあった古びたバーベル二本を持ち出した。バーベルは一本が7.5kgほどのもの。

「筋肉の鎧」を夢見て、そのバーベルをしゃにむに上げ下げし始めた。といっても、せいぜい数十回が限度。しかも、右利きの私であるが、痛みを覚える右よりも正常な左の腕の方の力が強い。

4. 三方からの鎧

何日か経ったある日、末の娘のアドバイスがあった。「お父さん、むやみやたらに鍛えても効果が薄いよ」、「肩の筋肉は、肩の外側、前、後の三方から鍛えるべきだよ」、「外側、前、後を鍛えるため、三通りの鍛え方をすると良いよ」。「まずは上半身を前傾した状態で、バーベルを外側に上げ下げする運動、二番目は、バーベルを体の前に上げ下げする運動、三番目は、まっすぐに立った状態でバーベルを横に上げ下げする運動」、とのこと。「また、上げ下げするときには、腕を少し曲げて良いが、伸ばし気味にし、それぞれをたとえば7回程度やると良い」とのアドバイス。

7.5kgのバーベルではあるが、それを単に上下方向に上げ下げすることとは異なり、この三つの運動、特に、体の横への上げ下げは、当初かなりの負担であった。とりわけ、右手での運動はきつかった。でも、やはり「継続は力」、少しずつではあるが、悪い右手の力が向上していると思われる。しかも、「姿勢が良くなっている」と、いわれることもある。

5. ふと思うこと

「筋肉の鎧」が肩の痛みをいやすと信じて、上に述べたように自分の肩を鍛える昨今。いくつか、ふと思うことがある。

陸上で走りをする人が、普通の人に比べて足が強

いことはいうまでもないが、走りをする人はなぜか上半身の筋肉もしっかりとしている。足を鍛えることが、足だけでなく上半身その他をも鍛えているのであろう。バーベルの運動も、適切に行えば、腕や肩を鍛えるだけでなく、体の他の部分をも鍛えるようだ。

また、「三方から鍛える」ことも教訓的だ。その鍛え方は、体のメカニズムあるいは肩の筋肉構造を考慮したものなのだろう。一方からの鍛え方（いわば、素人的な鍛え方）に比べて、娘から伝授された

三方からの鍛え方は、「より柔軟な鍛え方」のように思われる。前者の鍛え方を過剰にやると、翌日あるいは二三日後にやたらに体に疲れが残る。しかし、後者の鍛え方を過剰にやったとしても、そのような疲れ（特に、局所的な疲れ）は残らない。

さらに敷衍すると、無名会や日弁も生き物とすれば、それぞれの“五十肩”を持ち合わせているに違いない。この原稿を機に、そんな“五十肩”に対抗するため、どのような鍛え方をすべきかを考えたい。

